

# 一 所得税の導入

## 1、明治17年 財産等級税講説

一 編 ルードルフ氏口述

財産等級税講説

已代治

筆記

財産等級税ニ就テ垂問ヲ辱フス、今其要領ヲ述ヘンニ、国ノ内外ニ在ルヲ問ハス、凡ソ普国臣民タル者ニシテ一ケ年ノ歳入一千ターレルヲ有スル者ハ、此ノ財産等級税ヲ納メサルヘカラス、試ニ其割合ヲ示サンニ、千ターレル以上千二百ターレル以下一ケ年ニ付三十ターレルヲ納ムヘシ、一千二百以上一千四百以下ハ三十六ターレル、千四百以上千六百以下四十二ターレル、千六百以上千八百以下四十六ターレル、千八百以上二千以下五十四ターレル、二千以上三千四百以下ハ六十ターレル、二千四百以上八百以下七十二ターレル、二千八百以上三千二百以下八十四、三千二百以上六百以下九十六ターレル、三千六百以上四千以下百八ターレル、四千以上四千八百以下ハ百二十ターレルヲ納ムヘシ、此ノ如キ割合ニテ其収入額ノ増加スルニ随ヒ賦課ノ額ヲ増スナリ、此ノ増額ヲ示ス為メニハ別ニ表アレトモ今其煩ヲ省キ茲ニ略ス、今此表ニ拠ルニ財産等級税ハ凡ソ歳入百分ノ三ニ当ルナリ

其賦課法ニ至テハ各郡長其郡内ニ在リテ千ターレル以上ノ歳入ヲ有スル者ヲ取調ルノ職務ヲ有スルヲ以テ、財産等級税ヲ納ムル者ノ人名表ヲ調整ス、其納税者ノ人名簿ヲ調整スルニハ初メ千ターレルノ額ヲ以テ標準トシ、千ターレル以上ノ歳入アル者ノ姓名ヲ取調ヘ、而シテ其内各個人ニ就テ其歳入額ノ差ヲ精査シ其納税額ヲ定ムルナリ、郡長ハ歳入ヲ取調ル為メニ戸長ニ命シテ其町村内ノ人名簿ヲ差出サシム、即チ戸長ノ職務ハ其町村内ノ千ターレル以上ノ歳入ヲ有スル者ノ人名ヲ取調ヘ、猶其内ノ各個人ニ就テ其歳入額ノ差ヲ示スヘキノ職務ヲ有スルナリ、戸長ノ取調果シテ

確實ナルヤ否ヤヲ糺ス為メニ、郡長ハ自ら其当否ヲ調査スルコトヲ得、必スシモ戸長ノ報告ニ拘束セサルナリ、然レトモ其調査ノ方法ハ別ニ法律ニ指明セス、一個ノ信認ヲ以テ之ヲ取調ルナリ、例ヘハ不動産所有者ニシテ其納ムヘキ財産等級税額ニ疑ヒアルトキハ、則其人ノ知友ニ就キ、或ハ親シク其人ニ就テ其当否ヲ尋問シ、以テ戸長ノ調査果シテ其当ヲ得ルヤ否ヲ検討スル等、即チ是ナリ、一郡ニテ千タール以上ノ歳入アル者ハ其數僅少ナルヲ以テ、之ヲ取調ルノ法種々アリ、凡ソ家ニ余裕アル者ハ平素ノ衣食住ト欵、又ハ夏期ニ及テ旅行スル等、総テ上等ノ生活ヲ為ス者ニシテ、人ノ矚目羨望ヲ受クルコトモ多クレハ、其家計ノ如何ハ大概外面ヨリ之ヲ分明ニスルコトヲ得ルナリ、郡長此ノ如クニシテ其力ノ及フ丈ク穿鑿ヲ極メ其当否ヲ確定スヘシ、然レトモ其家ニ就キ窮乏帳簿ヲ検査スル等ノ權ヲ有セス、日本ニテハ例ヘハ一千タールルヲ四百タールトスルモ、富者ハ自ら郷邑間ニ其數僅少ナルヘケレハ、之ヲ取調ルコト甚タ簡易ナルヘシト思ハル

各個人ニ賦課スルノ額ハ郡会ヨリ公選サレタル賦課委員ノ定ムル所ニ依ル、其委員ハ一郡ニ付六名ヲ限ル、郡長モ委員長トナリテ議事ヲ統理スルナリ、委員ハ専ラ財産等級税ヲ納ムル者ニシテ、其郡内ノ事情ニ通曉スル者ヨリ公選スルナリ、郡長ハ納税者ノ人名簿ヲ委員ニ示シ、委員ハ其簿中ノ各個人ニ就テ納額ノ当否ヲ議ス、委員ノ調査ヲ経ルニ及テ却テ郡長ノ注意ノ及ハサル所ヲ提起シテ大ニ整頓ノ功ヲ顯ハスコトアリ、例ヘハ調査ノ粗漏ニ係ル一千タール以上ノ者ヲ摘発シ、或ハ其内ノ各個人ニ就テ何某ハ千五百タールトアレトモ二千タールノ収入アリ、其納額ヲ更ニ増スヘシト發議スル等ノ如キ即チ是ナリ、各個人ノ納額ヲ議スルトキ各個人ノ平素ノ生活等ヲ詳細ニ評議シテ、而シテ後チ其納額ヲ議決スルナリ、此委員ノ議ヲ經テ各納税者ノ納額決定スルニ及テハ、書面ヲ以テ其納額ノ若干ナル欵ヲ各納税者ニ通知スルナリ、納税者ハ此通知ヲ得テ後二ヶ月以内ニ其賦課ノ当否ニ付委員ニ對シテ異論ヲ申立ルコトヲ得、若シ納税者ノ申立ル所委員ノ之ヲ採用セサルトキハ、納税者ハ四週間内ニ<sup>再々</sup>委員ニ訴出ルコトヲ得ルナリ、

此県ノ委員トハ県会ヨリ公選セラレテ收税上ノ苦情ヲ審聽スルカ為メ設ケラレタルモノヲ云フ、納額確定スルニ及テハ毎月々賦ニテ之ヲ納メシムル者トス

歳入ノ計算法ヲ述ヘンニ、土地ノ歳入ハ總テ土地ヨリ拳クル所ノ収入ヲ包括ス、例ヘハ其之ヲ他人ニ貸スモ又自ら之ヲ耕スモ總テ其収入ヲ云フナリ、地面ヲ他人ニ貸渡スノ場合ニ於テハ、其借地料ヲ以テ收入トス、然レトモ借地料ノ外ニ其借地人ノ負担スル義務ヲモ之ヲ金錢ニ見續リ收入ノ一分トス、之ニ反シ若シ貸主ニ於テ義務ヲ負担シ、之カ為メニ費用ヲ要スルモノハ其費額ヲ收入ヨリ差引クナリ、斯ハ是レ借地ノ例ナリ、自ら耕スノ場合ニ於テハ前三年ノ平均收入高ヲ計算シテ其額ヲ定ムルナリ、三ヶ年平均収入ヲ以テ標準トスヘキモノハ土地ニ關係シタル製造所、例ヘハ煉瓦製造、陶器製造、石灰、石切場等ノ如キ是ナリ、土地ト家屋トハ常ニ分離スヘカラサルモノナルヲ以テ、家屋ヲ所有シテ之ヲ他人ニ貸ス者モ亦三ヶ年平均ノ借家料ヲ以テ其額ヲ定ム、自ら之ニ住居スル者ハ之ヲ他人ニ貸シテ收ムルコトヲ得ヘキ借家料ヲ概算シテ其額ヲ定ムルナリ

以上述フル所ハ土地ノ利益ニ就テ言ヒタルナリ、之ヲ財産等級税課目ノ第一種トス、其收入額ノ内年々ノ租税其他負債ノ抵当トナリタル者ハ其利子ヲ差引クナリ、是ヨリ財本ヨリ生スル所ノ歳入ニ就テ述ヘン、之ヲ財産等級税課目ノ第二種トス、此財本ノ利益トハ金錢貸借ノ利子、公債証券ノ利子、或ハ会社株券ノ利子等ヲ總稱ス、財本ノ利子ノ外其余ノ歳入、例ヘハ生命保險会社ヨリ年々受取ル所ノ配当金ノ如キハ、別ニ從來積金シタルモノノ内ヨリ償却ヲ受クル者ニシテ、敢テ之ヲ目シテ金利トナスコト能ハスト雖モ、亦之ヲ以テ金利ト見做シ財本ノ利益トシテ税ヲ課スルナリ

課目ノ第三種ハ商業工業總テ利益ヲ得ル所ノ營業并勞力トス、官吏ノ俸給退隱料モ亦之ニ屬ス、此三種類ニ屬スルモノハ總テ前三年ノ比較平均高ヲ以テ標準トシ納税ノ額ヲ定ム、此收入高ヨリ差引クヘキモノアリ、商業ヲ營ムモノハ

商業ニ必要ナル家屋ノ保存費、書記手代ノ給料等はナリ、家屋土蔵ノ如キハ年々歳月ヲ経ルニ隨テ其価格ヲ損スルヲ以テ、幾分カ其損耗ノ額ヲ差引クナリ、官吏ノ如キハ毎歳收入ノ定額アリテ更ニ其收入ヲ得ルニ費ス所ナキヲ以テ、別ニ其歳入額ヨリ差引クヘキモノナシ、之ニ反シ官宅ニ居住スル者ハ官宅料ヲ見積リ其歳入ノ額ニ加シヘシ以上叙述スル所財産等級税ノ大要トス、此ノ財産等級税トハ独リ一千ターレル以上ノ收入ヲ有スル者ノミニ賦課スルモノニシテ、郡長専ラ其任ヲ担当シ戸長ハ其指揮ヲ仰テ事ニ任スルノミ、一千ターレル以下ノ額ニ課スルモノハ之ヲ単称シテ等級税ト云フ、其名称相異ナリト雖モ其実同種類ノ税目ニシテ、彼ハ一千ターレル以上ヲ云ヒ、此ハ其以下ヲ称ス、要スルニ以上以下ノ區別ニ過キス、然レトモ其以下ニ課スルモノニ至テハ、殆ト日常ノ生計ニ窮迫スル細民ヲモ網羅シテ之ニ其税ヲ課スルモノナルカ故ニ、我普國ニ於テハ方今等級税廢セサルヘカラサルノ説政治社会ニ喧シク、既ニ之ヲ廢スヘキノ傾向ヲ示シテ未タ全ク法律ヲ以テ之ヲ廢スルコトヲ得ルノ時機ニ達セサルハ、我國民ノ甚タ痛歎スル所ナリ、今試ニ其賦課ノ割合ヲ示サンニ、百五十ターレル以上三百二十ターレル以下一ターレル、二百二十ヨリ三百ターレル以下二ターレルヲ課シ、其等級總テ十二等トス、細民ヲ驅テ苛税ニ苦メントスルモノ、却テ實際ニ於テ其徵收ニ非常ノ困難アリ、故ニ今日ニ於テハ未タ法律ヲ以テ全ク之ヲ廢セスト雖モ、實際下等ノ等級納税者ハ率テ納税ヲ免除スルノ状勢ナルカ故ニ、實際ニ於テ此税法ハ既ニ之ヲ廢セリト云フモ敢テ不可ナルナシ、等級税ノ弊害實ニ率テ數フヘカラス、此ノ如キ惡法ハ固ヨリ取ラサル所、日本ノ徒ニ此ノ法ニ模倣シテ細民ヲ困窮セシメサランコト、實ニ仰望ノ至ニ堪ヘサル所ナリ

之ニ反シ財産等級税ハ則チ然ラス、凡ソ一千ターレル以上ノ歳入アル者ノミニ課スルノ法ナレハ、實際之ヲ徵收スルニ甚タ易キ所アリ、況ヤ此ノ納税者ハ多ク財産ヲ有シ家ニ余裕アルモノ、ミナレハ、其負担ニ堪ユルコト固ヨリ彼ノ細民ト日ヲ同フシテ論スヘキニ非ルニ於テヲヤ、我普國ニ於テ一千ターレルヲ以テ標準トスルモノ、若シ之ヲ日本

ニ施行スルニ於テ、或ハ其額ノ多キニ過クルノ慮アラハ、則チ之ヲ減シテ五百乃至六百ヲ以テ其最下額トスルモノナリ、唯々細民ヲ苦メサル様注意スルコソ肝要ナリ、其以上ノ人民ニ課スルニ此ノ税ヲ以テスルハ素ヨリ税法其當ヲ得ルモノト云フヘシ、我國ニ於テ此ノ税法ヲ設タルハ實ニ一千八百五十一年トス、爾來星霜ヲ経ル既ニ三十年ヲ超ユ、此ノ間ノ経験ニ由レハ此税法中賦課ノ割合未タ穩当ナラサルモノアリ、回顧スレハ此ノ法三十年前ノ創設ニ係ル、今日ヨリ之ヲ見レハ素ヨリ多少ノ修正説アリト雖モ、要スルニ此税ヲ課スルノ大体ニ至テハ動かサヘカラサルモノアリ、又毎歳之ヲ賦課スルニ於テ其割合ノ穩当ナラサルヨリ紛議ヲ起スコト猶今ニ絶ユルコトナシ、毎年納税者中其賦課ノ額ニ就テ紛議ヲ起ス者ノ數平均一割ヲ以テ數フ、因テ以テ未タ割合ノ穩当ナラサルヲ見ルヘシ、日本ニ於テ此税法ヲ施行スルニ及テ最モ其割合ヲ斟酌セサルヘカラス、賦課ノ事ニ就テ紛議ヲ起シタルトキハ随分事面倒ナリ、初メ賦課ノ額ヲ定ムルニ當リ、素ヨリ各納税者ノ家ニ就キ其帳簿ヲ檢討シテ其收入額ヲ計算シタルニアラス、郡長モ亦此ノ徵税ニ關シテ其家宅ヲ搜索スルノ權ナシ、外面ヨリ其家産ヲ概算スルモノ、若シ其當ヲ得サルカ為メニ之ニ不服ヲ懷クモノ、之ヲ県ノ委員ニ訴ヘ其改正ヲ求ムルニハ其果シテ當ヲ得ス、其歳入ノ定額ハ何程ナルト云フコトヲ証明セサルヘカラス、委員ニ於テモ亦其家ニ就キ帳簿ヲ検査スルコトヲ得ルナリ、若シ自ラ之ヲ証明スルヲ拒ミ、或ハ其帳簿ノ検査ヲ拒ムニ於テハ素リ立証ノ効ナキヲ以テ、其不服ノ申立ヲ採容セス、故ニ強迫シテ其帳簿ヲ検査スルノ要用ナシトス

此ノ財産等級税ハ恰モ二重税ヲ課スルモノ、如シト雖モ決シテ然ラス、二重税トシテ之ヲ排斥スルハ皮相ノ見ノミ、試ニ思ヘ、税ヲ課スルニ貧富各其分ニ応シテ負担ノ度合ヲ定ムルハ税法ノ最モ主眼トスヘキ所ナリ、復タ試ニ見ヨ、此ノ他一箇ノ物ニ課スル税ノ如キ唯々均一ヲ主トシテ貧富ノ別ヲ見ス、故ニ之ヲ負担スル者ニ至テハ其貧富ノ差ニ由テ大ニ難易ノ別アリ、百頃ノ田園ヲ有スルモノ一頃平均三円ノ税、即チ三百円ヲ納ムルト、僅ニ二頃ノ田園ヲ有シテ

六円ヲ納ムルトハ、其額ノ多少固ヨリ比較スル迄モナキコトナレトモ、富者ノ三百円ヲ払フニ比スレハ貧者ノ六円ヲ払フハ最モ難キモノアリ、故ニ貧富各其力ニ応シテ納税ノ負担ヲ穩當ナラシムルニハ、此財産等級税ヲ設クルニ如カス、要スルニ他ノ税ハ一個ノ物ニ課スルモノニシテ、此税ハ人ノ活動ニ課スル者ナリ、凡ソ人ノ此世ニ生活スルヤ各其力ニ応ジテ貨殖ノ道ニ勞働スルモノナルカ故ニ、其勞働ニ類テ得ル所ノ利益即チ其歳入ニ税ヲ課スヘキハ、猶一個ノ物ニ課スルカ如クナラサルヘカラス、之ヲ以テ淺薄ニモ二重税ナリトシテ之ヲ擯斥スルハ大ナル謬見ナリ  
此頃口開ク、我獨逸帝国内ノ薩克遜ニ於テ過般財産等級税ノ新法ヲ設ケタリト、我普國ノ財産等級税法ハ前ニモ述ハタル如ク、三十年前ノ創設ニ係ルヲ以テ、往々妥當ナラサル條款モ今猶現存スルナレトモ、今此新法ハ我普國三十年余実験ノ成跡ニ就テ其利害ノ存スル所ヲ詳ニシ、務メテ利ヲ擧ケ害ヲ剔キタルモノナリトハ、多ク世人ノ伝唱スル所ナルヲ以テ、若シ日本ニ於テ此ノ法ヲ實施セラル、ノ意アラハ、彼ノ新法ノ立条ヲ參觀シテ以テ斟酌ノ具ニ供セハ、蓋シ多少ノ得益アルヘキヲ信スルナリ

(宮内庁書陵部所藏「秘書類纂」財政三)

## 2、明治17年 財産等級税考説 第二篇

### 一、財産等級税考説 第二篇

#### 財産等級税考説 第二篇

明治十七年十一月廿四日問答筆録

伊東巳代治曰ク、財産等級税ノ事ニ付テハ一昨日ノ御説明ニテ大意ヲ了解スルコトヲ得タリ、依テ直チニ寫筆シテ伊

藤公ノ閱覽ニ供シタルニ、猶ホ其細目ニ就テ貴説ヲ請フヘキ旨命セラレタルヲ以テ、順次答弁ヲ煩サントス、凡ソ税ヲ徵スルニハ種々ノ税目アリテ自ラ比較シテ輕重厚薄ノ弊ヲ免ル、コト能ハス、歐洲ニ於テモ今其一例ヲ擧ケレハ煙草ノ税ハ重クシテ麥粉ノ税ハ輕キカ如ク、物各々ニ賦課スル税額ニ於テハ決シテ一定シテ偏頗ナシト云フヲ得ス、獨逸國ニ於テ此財産等級税ヲ課スルニハ單一ニ收入額ノミヲ標準トシテ直税ヲ負フモノ、中ニ就テ、別ニ斟酌ヲ要スルコトハナキ歟、例ヘハ麥ノ如キモノハ税額モ卑ケレハ財産等級税ヲ課スルモ敢テ痛痒ヲ感セスト雖モ、煙草ノ如キハ其税額最モ高キモノナレハ、其收入ニ對シテ財産等級税ヲ怨スル等ノコトハナキ歟、獨逸現行ノ法律ヲ示サレシコトヲ望ムナリ、日本ニ於テモ同税目ノ中ニ自ラ厚薄ノ跡ナキヲ得ス、往古ニ在テハ國稅ト云ヘハ宛モ地稅ニ限レルモノ、如キ有様ナリ、畢竟徵税ニ容易ナルモノニ賦課シタル賦課ニテ、今日地稅ハ他物ニ比スレハ非常ニ重シト云フモ誣言ニアラス、其他酒煙草ノ類モ亦然リトス、尤モ此事ハ但々比較論ヨリ云フコトニシテ、正当ニ其厚薄多少如何ヲ論スルニアラサルナリ、故ニ將來徵税スルニ差支ナキ目ニ於テハ素ヨリ論ナシト雖モ、昔時ヨリ今日ニ至ルマテ業ニ既ニ取リ尽シタル地所又ハ酒・煙草ニ、此財産等級税ヲ賦課スルハ頗ル難事ナラント思惟ス、此辺ハ貴下ノ御草案ニテハ如何ニセラル、ヤ

ルードルフ曰ク、我普國ノ法律ニテハ税額ノ多少ヲ斟酌シテ財産等級税ヲ賦課スルコトナク、單一ニ其收入額ヲ標準トシテ等級税ヲ徵スルナリ、日本ニ於テモ税ニ輕重ノ差アラシラシテ察知スルヲ以テ、余ノ草案中ハ夫レ等ノ事情ヲ斟酌シタルコトナリ、過般各地ヲ巡回シテ日本内地ノ狀況モ粗ホ詳ニシ、且ツ税法ノ大意ヲモ了得セシヲ以テ、獨逸ノ法律ヲ直チニ日本ニ移サントスルノ不可ナルヲ知レリ、故ニ余ノ草案中ニハ先ツ收入額四百円以上ノモノヲ最下限トシテ、之ニ一円ヲ課税スル積ナレハ、則チ収益ノ四百分ノ一タリ、儻ラ日本地主ノ有様ヲ窺フニ、所謂小百姓ト云フモノ大半ニ居リ、西洋ノ地主ノ如ク一人ニシテ數十里若クハ數百里ノ田地ヲ有スルモノ絶テナシト云フモ不可ナ

キカ如シ、然ラハ日本農家ニシテ四百円以上ノ収入アルモノハ甚タ多数ナラスト信ス、而シテ四百円以上ノ収入アルモノハ、仮令ヒ地租其他ノ重税アルニモセヨ、一般ノ重税ト異ナリ收入ニ對シテ僅々四百分一ノ財產等級稅ヲ納ムルハ、敢テ難事ト云フヘカラス、故ニ此等級稅ハ各其力ニ能フモノヲシテ相当ノ義務ヲ負ハシメ、決シテ佃民ヲ苦シムルモノニアラス、且ツ財產ノ上ニ賦課スル稅法ハ徵稅者モ被徵稅者モ互ニ困難スルコトナシ、況ヤ獨逸國ノ該法ニ比セハ、日本ノ千八百円以上ノ稅額ハ獨逸國ノ二千「ターレル」ノ稅額ニ匹敵スヘシ、余ノ草案ニ於テハ等級ヲ分ツテ五十六等トス、而シテ以上壹万円毎ニ三百円ヲ徵スルナリ、今聊カ參考ノ為メ初等ヨリ十五六等ニ至ルノ稅額ヲ述フヘシ、歲收入四百円以上五百円迄壹円、五百円以上六百円迄二元、六百円ヨリ七百円迄四円、七百円ヨリ八百円迄六円、八百円ヨリ九百円迄八円、九百円ヨリ千円迄十一円、千円ヨリ千五百円迄十四円、千五百円ヨリ千二百円迄十八円、千二百円ヨリ千三百円迄二十二円、千三百円ヨリ千四百円迄二十六円、千四百円ヨリ千五百円迄三十一円、千五百円ヨリ千六百円迄三十六円、千六百円ヨリ千七百円迄四十二円、千七百円ヨリ千八百円迄四十八円、千八百円ヨリ千九百円迄五十四円……………、二千円ヨリ二千二百円迄六十円トス、蓋シ此割合ハ凡ソ百円毎ニ五分一ヲ増加スルヲ標準トスト雖モ、初等ノ部ハ二分一ヨリ起リ漸ク其額ヲ増スニ隨テ其差額ヲ減シテ三分ノ以下ニ至ル、獨逸國ノ法律ニ拠レハ千円ニ付六十円ノ割合ナレトモ、此法案ニテハ十四円ニ過キササルナリ、要スルニ前ニモ陳述セシ如ク、日本ニ於テハ小百姓大半ニ居レハ等級稅ヲ課セラル、モノ、數甚タ多カラサルヘシ、何トナレハ等級稅ハ租稅諸掛リヲ除シテ純粹ノ利益四百円以上ヲ得ルモノニノ賦課スルヲ以テナリ、仮リニ納稅者多數ナリトスルモ、以上ノ失費ヲ除去シ全ク四百円以上ノ收益アルモノニシテ、僅ニ壹円ノ等級稅ヲ納ムル何ノ難キコトカ之レアラン、尚ホ括メテ之ヲ云ヘハ二千円ノ収入アル農家ニシテ六十円ノ等級稅ヲ納ムルハ苛キニ似タレトモ、租稅其他諸掛リヲ差引キタル後手全ク自己ノ遺私ニ供スル内ヨリ三分ノ等級稅ヲ納ムルハ、決シテ苦シキコトニアラス、抑モ財產等級稅ハ一昨日モ陳ヘタ

ル如ク物ニ課スルニアラスシテ各自ノ力ニ応シテ國庫ヲ盈タスノ精神ニ出ツレハ、以上舉クル所ノ割合ヲ以テ苛酷ト云フヲ得ス、蓋シ納稅ノ義務ヲ負ヘルモノ數多アリト雖モ、就中財本家又ハ大地主ハ最も確固ナルモノニシテ、是等富有者ヨリ徵セスハ將タ孰レヨリカ徵スルコトヲ得ン、故ニ何等ノ情故アルモ財產等級稅法中ヨリ土地ヲ除去スルハ同意ヲ表スル能ハサル所ナリ、但朝三暮四ノ計ナキ寒民ニ向テ課稅スルハ忍ビサレトモ、四百円以上ノ收益アルモノ及ヒ公債証書ヲ貯ヘテ生計ヲ當ムモノ、如キハ決シテ怒スルヲ要セス、是ヲ以テ余ハ四百円以上ノ収入アルモノト断定セリ、畢竟日本ニ於テ最も生計ニ苦シムモノハ約千四百円以下ノ収入アル小百姓ノ間ニアルヘシ

伊東已代治曰ク、洋ノ東西ヲ問ハス凡ソ邦家ノ徵稅ハ必要ヨリ起ルモノナレハ、予シメ何品ヨリ徵スト限レルノ理ナシ、畢竟必要アリテ資財ヲ要スルナレハ、米ニ稅ヲ課スルトテ酒ニモ必ス課稅セサルヘカラスト云フヲ得ス、故ニ等級稅ノ如キモ各自資力ニ応シテ國庫ヲ盈タスノ旨趣トスレハ更ナリ、昔時ヨリ日本ノ地主ハ納稅義務ノ全部ヲ負ヘルモノ、如ク、因襲今日ニ至リ恰モ三重四重ノ重稅ヲ荷ヘリ、之ヲ他物ニ比セハ洵トニ負担ニ堪ヘサルカ如シト雖モ、日本ハ農業ヲ以テ國ヲ立ツレハ人土地ヲ見テ至重ト為シ、苟モ家余裕アルモノノ地ヲ購フテ子孫ノ計ヲ為サ、ルモノ稀ナリ、故ニ往時ニ在テ最も堅固ナル家計ヲ云ヘハ不動產ヲ除テ他ニアルコトナシ、然ルニ大政維新ノ後世變ト共ニ大ニ經濟ノ趣ヲ異ニシ、今日民間ノ貨殖ノ道亦一變セリ、就中頭等ナルモノヲ云ヘハ政府公債証書ヲ發行セシコトナリ、抑モ公債証書ハ不動產ニ比スレハ殆ト倍加ノ息子ヲ得テ毫モ危險ナク、却テ一錢納稅ノ義務アルコトナシ、土地ハ即チ之ニ反シテ既ニ上ニ述フル如ク數多ノ稅ヲ負フカ故ニ、全ク地主ノ純益ニ至テハ一步乃至ニ下ニ下ス、然ルモ彼是異別スルナク均シク其財產等級稅ヲ課セラル、ニ於テハ、財本家ト地主ノ負擔輕重ハ霄壤モ畜ナラス、各其力ニ応シテ納稅スルノ趣意ニ悖ルモノト云フヘシ、而シテ收入ノ額ヲ標準トスレハ、收入ノ平均ハ得ルモノ素ト之ニ用ヒタル資本ノ平均ハ得ルモノト能ハス、假令ハ千円ノ資ヲ投シテ百元ノ利ヲ得ルト、一萬元ヲ投シテ同シ百元ノ益ヲ得ル

トハ、其結果ニ至テハ共二百円ノ利ヲ収ムルモ、其元資ニ至テハ十ノ一ニシテ大ナル不平均ト云ハサルヲ得ス、然ルモ財産等級税ハ収入額ノ平均ニ付テ賦課シ其資本ノ多少如何ニ關セサル、貴説ハ既ニ之ヲ了解スト雖モ、翻テ日本ノ現状ヲ視レハ、既ニ上ニ述フル如クナレハ、其地主ノ困難ハ名状スヘカラサルモノアリ、將タ亦日本ノ地主ニシテ何程ノ純益アリト計算スルハ頗ル難事ニ屬ス、若シ地租何程地方稅何程諸掛リ何程、肥料小作料等何程ト綿密ニ計算セハ、或ハ純益ナキニ至ランモ亦未タ知ルヘカラス、是等ノ事項ハ既ニ御考按モアルヘシト僞スレハ、敢テ開示セラレシト希望ス

ルードルフ曰ク、誠ニ貴説ノ如ク細民ヨリ徵稅スルハ難事ナリ、故ニ余ハ四百円以上トセシトナリ、四百円以上ノ収入アルモノハ少ク、所謂大百姓ナリ、蓋シ大百姓ハ多ク小作人ヲシテ作ラシメ、而シテ其收益ヲ得ルモノナレハ、小作料ヲ積算スレハ純益ヲ現ハスヘシ、独逸國ニ於テモ此積算ハ敢テ難事トセサル所ナリ、余ハ未タ日本ノ國情ニ曉通セサルヲ以テ確言スルヲ得スト雖モ、大体ニ就テ云ヘハ二様ノ方法アリ、第一ハ官ヨリ予シメ賦課額ヲ定メ、若シ其課稅額ニ不服ヲ訴フルモノアレハ其事由ヲ具申セシム、第二ハ地方官ニ命シテ人民ノ財産ヲ調査セシメ、若シ其調査上ニ欺隱スルモノアレハ之ヲ罰シ、而シテ其収入額ヲ確認スルナリ、然レトモ独逸國ニ於テハ第二ノ方法、即チ地方官ヲシテ人民財産ヲ取調ヘシムルハ民心ニ乖クトシテ実行セサリキ、凡ソ何人ニテモ自己ノ財産額ヲ世上ニ知ラル、ヲ厭忌スルハ通情ナリ、余ハ前ニモ云フ如ク、未タ日本ノ國情ヲ熟知セサレハ、其之ヲ行ヒ得ルヤ否ハ知ラズト雖モ、聞ク所ニヨレハ、近頃索克遜ニ於テ設ケタル法ニ拠レハ、幾分敏第二ノ方法ヲ參酌セシモノ、如シ、例ヘハ郡長其額ヲ定メ、然ル後郡ノ委員會ニ付シテ其當否ヲ議セシムルナリ、若シ委員ニ於テ其財産額ニ不明瞭ト認ムルコトアルトキハ、人ヲ派シテ財産ヲ調査スルノ權ヲ委員ニ与フルノ制ニシテ、余ハ甚タ穩當ノ方法ナリト思惟ス、独逸國ニ於テモ曾テ此法ヲ布カント企テタルコトアレトモ、人情ニ悖戻スルノ恐アリトシテ、一タヒ國會ノ議ニ付セシト雖モ、議

論喧嘩遂ニ今日ニ至ルマテ実行スルヲ得ス、故ニ独逸國ニ於テ財産調査表ハ專ラ世上ヘ洩漏セシトコトヲ憚リ、其掛リ吏員ノ如キモ秘密ニ取扱フナリ、畢竟右ニモ陳ヘシ如ク、一個人ノ歲計ヲ世間ニ發露スルハ最モ人心ノ厭フ所ナルヲ以テナリ、併シナカラ稅法監督ノ点ヨリ云ヘハ、財産表ヲ世上ニ公示スルハ甚タ便益ナリトス、余ハ未タ日本ノ民意如何ヲ詳知セサレトモ、普通ノ觀察ヲ以テスレハ独逸國ノ如ク秘密ニスルヲ穩當ト信ス、猶ホ是ヨリ種々陳述セシコトヲ欲スレトモ、本日ハ井上氏ノ葬儀ニ御參會ナレハ問答ヲ此ニ止メ、願クハ夕刻ヨリ鹿鳴館ヘ枉車セラレシトコトヲ、而シテ會食ノ後委シク高説ヲ揮聴センコトヲ望ムナリ

承前

同日夜 鹿鳴館ニ於テ

伊東巳代治曰ク、過刻土地又ハ烟草等ニハ既ニ重稅ヲ負フヲ以テ、此財産等級稅ヲ免除セントノ意ヲ以テ少シク現状ヲ申述ヘタレハ、是ヨリ後貴下ノ高説ヲ揮聴セン

ルードルフ曰ク、如何ニモ土地ニ重加ノ稅アルヲ以テ、其上財産等級稅ヲ課スルトキハ負担ニ堪ヘサラントノ費稅ヲ了知セリ、余モ亦之ヲ思ハサルニアラス、然レトモ等級稅ハ一人ニ課シテ一人ニ課セスト云フニアラスシテ、一般農工商ノ資力ニ応シテ財産ノ上ニ賦課スルナリ、即チ地持ナレハ其土地ノ收入、商人ナレハ売益、工人ナレハ其職業ノ利益ト、總テ其収入額ヲ標準トシテ課スルナリ、日本ニテハ地稅アリ、營業稅アリ、唯タ未タ之ナキハ資本稅ト收入稅ナリ、故ニ今資本稅ヲ起シテ公債証書ヲ所持スルモノニモ課稅スルハ、復タ時勢ニ適合スルノ良法タルベシ、抑モ等級稅ナルモノハ必ス各個同一ニ割リ当ル旨趣ナレハ、日本今日ノ狀況ニテ土地ノ收入ニ課稅スルヲ不可トセハ、宜シク例外トシテ当分ノ中免除スヘシ、決シテ永遠ニ免除スルノ理ナシ、但シ外ニ資本稅ヲ設ケテ、公債証書ヲ所持スルモノ、如キ財本家ニ課稅スルトキハ、財産等級稅ト相須テ一般ノ偏頗ヲ救フニ足ラン乎、我普國ニハ未タ資本稅ノ

制ナキヲ以テ、如何ナル方法ニ拠ルカ余ハ今答弁スルコトヲ得ス、又該法ノ舊類モ歳セサレハ各国ノ例ヲ穿鑿スルニ由ナシ、何ニセヨ等級税ニ土地ヲ除テ他物ニノミ賦課セントスルモノ各國ニ其例アルヲ聞カス、然レトモ日本ニ於テ行政ノ実況ニ仍リ此上土地ニ課税スルヲ得ストセハ、暫ク取り除ケテ設タルノ外ナシ、唯其取除テ永久ニ及ホサントスルハ不同意ナリ、若シ此取除ケテ當分トシテ他ノ四百円以上収入アル者ヲ標準トシテ課税セハ、細民ノ休戚ニ関スルコトナク充分此法ノ実行セラル、コトハ信ジテ疑ハサルナリ、過般余ノ旅行中ノ経見ニ仍レハ、四百円以上ノ収入アル農家ハ甚タ多カラス、独リ新潟県ニ於テハ二千円以上者万円内外ノ収益アル大百姓アリキ、是等ノ大百姓ハ僅少ノ等級税ヲ納ムルハ容易ナラン、資本税ノ事ハ現時獨逸國ニ於テモ調査中ナレトモ、刻下參議院ヲ擧ヘサルヲ憾トス

伊東曰代治、更ニ前説ヲ敷衍ス

ルードルフ曰ク、日本ノ現況ニ付テ云フトキバ、貴説ノ如ク等級税ハ恰モ二重税ノ如シト雖モ、之ヲ徴スルニ當テハ其原品ニハ皆一様ノ課税シタルモノト視做サ、ルヘカラス、故ニ其原素ノ平均不平均ハ此税ヲ課スルモ斟酌スルヲ須ヒス、然リト雖モ日本ノ現況ニ仍テ當分ノ中土地ノ収入ニ課税スルコトヲ止ムルモ不可ナシ、但シ地租及ヒ賭掛ノ多額ナル為メニ等級税ヲ課スルヲ得ストスレハ、夫レ等ノ税ヲ減シテ等級税ハ一様ニ賦課スルモノ可ナリ、日本ノ土地ニ課スル諸税ノ怪カラサルハ余モ亦之ヲ知ル、然レトモ余ハ今果シテ何程高シト明言スルヲ得ス、且ツ又貴説ニ仍レハ収入スル額ハ平均ヲ得ルモ、其収入ノ原素タル資本ニ至テハ平均ヲ得ルノ途ナシ、而シテ其結果トシテ此税ヲ納ムルニ怪重寛荷ノ別ナキヲ得スト云フハ一理アリト雖モ、独乙國ニ於テモ収入ノ平均ハ得ルモ資本ノ平均ヲ得サルハ同一ナリ、米國ニ於テハ何某ハ地面ヨリ何程ノ何業ヨリ何程ト綿密ノ調査アレハ、其資本額ノ平均モ得ラルヘシ、然レトモ凡ソ利益ヲ得ル事業ハ同額ノ資本ニ拠ルモ、其賢愚幸不幸等ニ仍テ所得ニ多少ノ差違アルハ論ヲ俟タサルコト

ナリ、商賈ニテモ巧ニ仕入レテ廉売スルモノモアレハ、到底資本ニ依シテ収益ノ平均ヲ認ムルコトハ能ハサルコトナリ

一ヒヤノノノノノ

伊東曰代治曰ク、粗ホ了解セリ、且ツ一昨日ノ御説明モ悉ク書記シテ伊藤公ノ御手許ヘ差出シ置キタリ、同公ノ説ニモ地面・烟草・酒ノ如キモノハ既ニ重税ヲ荷フ、夫レ税ハ國家歳計上ノ必要ヨリ起リ、均シク之ヲ徴スルノ至理ナルハ弁ヲ費スヲ要セスト雖モ、必ス國勢ノ如何ヲモ顧ミサルヘカラス、政ヲ為スモノ恆ニ眼ヲ此ニ注カサルヘケンヤ、故ニ暫ク土地・酒ノ類ハ等級税ヲ免除シテハ如何ト云ハレタリキ

ルードルフ曰ク、收税ノ原理ニ於テ永遠ニ土地・酒ノ類ヲ除クハ余ノ服サ、ル所ナレトモ、一時止ムヲ得サル場合ニハ前陳ノ如ク取除ケサルヲ得ス、而シテ公債証書ノ如キ利厚フシテ納税ノ義務ナキモノヲシテ均シク納税セシメントスルニハ、資本税ヲ起シテ成ルヘク偏セサルコトヲ期スヘシ、余ノ聞ク所ニ拠レハ、巴華里ニ於テハ資本税アリテ財産等級税ナシ、併シ地租・營業税・収入税ノ三アリテ、収入税ノ中ニハ給料及ヒ資本等ノ税目アリ

酒税ノ事ニ就キ貴説モアリタレトモ、畢竟酒ハ間税ニシテ実ハ酒造家ノ囊中ヨリ出ツルニアラス、飲者其人ノ弁スル所ナリ、故ニ若シ其重税ノ為ニ等級税ヲ課スルヲ得サレハ、又其造石税ヲ減シテ別ニ等級税ヲ課スヘシ、余ハ酒ヲ免除スルコトハ土地ノ大ニ斟酌スヘキノ理由アルト同一視スルヲ得ス、若シ酒ハ重税ノ為メニ不捌ナリトセバ減税スルモ可ナレトモ、捌ケ方ニ左ノミ影響ヲ及ホサス、漫ニ重税ヲ以テ苦情ヲ唱フレハ酒ノ代価ヲ増スヲ至當トス

伊東曰代治曰ク、酒造税ニ付テハ別ニ少シク弁解セント思考セシニ、図ラス貴下ニ先鞭ヲ着ケラレタリ、貴説ノ如ク酒税ノ間接ナルコトハ了解セリ、故ニ何程ノ税ヲ課スルモ結局其税ハ悉ク飲用者ノ負担ニ属スヘシ、是等ノ事ハ理論上親易キノ教ナリト雖モ、日本ノ酒ハ酒造家ト問屋ノ間ニ種々ノ慣行アリテ、酒造家ハ年々醸造スル所ノ酒ヲ問屋ニ

輸シテ、問屋ハ翌年ニ至リ其決算ヲ遂クルノ類ニシテ、酒造家ハ必ス問屋ノ手ヲ経サレハ売捌クコトヲ得ス、其間互ニ利益ヲ壟斷セントシ、名ハ間税ニセヨ実ハ酒造家ニ於テモ幾分ノ税ヲ負フノ実アリ、特ニ西洋酒類ハ全ク釐沢品ナリト雖モ、日本酒ハ之ニ異ナリ代価モ廉ニシテ殆ト民間日用物ノ一二位スルカ如キ状態ナレハ、税ノ多少ハ頗ル売捌ケニ關係ス、併シ今日迄ハ造石税ハ國稅中重ナル部分ヲ占ムルナリ、故ニ仮令ト他ニ稅法ヲ設クルモ、俄ニ酒造稅ヲ減スルコト能ハスト斷定ス、如何トナレハ政府設計上ニ容易ナラサル變動アランヲ恐ルレハナリ、依是觀之既定ノ造石税ハ存シテ暫ク等殺稅ヲ免除スルノ穩当ナルニ如カス、素ヨリ均一視スル等級稅ノ原理ヨリ云フトモハ、永遠ニ免除スルノ理万ナシト雖モ、以上ノ情勢ニ依リ當分ノ間免除スルトセハ可ナランカ、尤モ是等ノ事ハ草按ノ就リタル後ニ論定スルモ敢テ晚キニアラサルヘシ、此法案ニ付テハ伊藤公ノ御意見モアレハ、今日貴下トノ問題ハ筆記シテ同公ノ一閱ヲ請フヘシ

ルードルフ曰ク、草按ハ猶ホ未タ取調中ニ付、脱稿スルカ否ヤ直ニ翻譯シテ貴官ニ致スヘシ、尚ホ其上ニテ商議スル所アラントス

(國立公文書館所藏「諸雜公文書」2A 37 雜103)

### 3、明治17年 收入稅法律案

拜啓、予テルードルフヲシテ調査セシメラレ居候、財産等級稅法案草案脱稿候ニ付、別冊和訳一本上呈候間、乙夜被為瀏覽度候、就テハ尊論ニ依リ親シク同人ニ就テ所疑ヲ質シ候所、逐一答弁ヲ得候ニ付、是亦別冊第一篇・第二篇考説ヲ作り併セテ供高閣候、然ルニ右第二篇考説中巴華里該法ニ付キ質問候所、刻下材料ニ供スヘキ書綴ノ用意無之旨

ニ付無詮事ニ候得共、ルードルフノ所説ニテハ巴華里ニ於テハ收入稅ノ外ニ資本稅アルモノ、如ク答議シ、且本邦土地ヲ有スルモノト公債證書ヲ有スルモノトニ就テ對比并論セシニ、同人モ其輕重ヲ悟リ候ニ付テハ、公債證書等ヲ有スルモノ、為ニ別ニ資本稅ヲ課シテ其不平均ヲ補ヒ、然ル後均一ニ收入額ニ對シテ等級稅ヲ課スルトキハ、二法相須テ權衡宜シキヲ得ヘシトノ説ニ候得共、巴華里ニ於テハ別ニ資本稅アルニアラスシテ、財産稅ノ一部ニ居候事ニ承知候ニ付、猶ホロエスレルニ就テ其弁疑ヲ請ヒ候所、全ク愚考ノ通ニ付、ルードルフノ説ハ偶誤ニ出テ候乎、即チロエスレルヨリ所示ノ資本利得稅法并ニ産業稅則、シヨードンヲシテ英訳セシメ、後復タ和文ニ重訳シ、共ニ結束シテ机辺ニ上リ候間、可然御裁鑑所願ニ候、且又巴華里ノ資本稅ハ直ニ本邦ニ移シテ恐モ支障ナキノミナラス、却テ今日ノ不公平ヲ匡スルニ於テ最モ恰当ノ法律ト存候、ルードルフ呈案財産等級稅ニ至テハ目下細目ノ利害得喪攻究罷在候ニ付、不日卑見ヲ陳シ再ヒ奉煩高覽度候、敬具

明治十七年十二月

伊東巳代治

伊藤參議殿閣下

#### 目録

財産等級稅考説 第一篇

#### 問答筆記

同 第二篇

ルードルフ氏起案

收入稅法律案 一冊



収入税法草案

別紙収入税法草案ヲ呈ス

本案中閣下ノ命ニ從ヒ、地租ヲ納ムヘキ土地ヨリ生スル収入ノ課税、并ニ酒造所ノ収入税ヲ免除シタルモ、其他ノ収入種類(資本・營業・俸給其他一切ノ収入)ニハ悉ク之ヲ課セリ

閣下幸ニ本案ノ原則ヲ採容スルアラハ、速ニ其施行上必要ナル訓令ノ立案ヲ小官ニ委任シ、來千八百七十五年ヲ以テ本律ヲ頒布シ、該年度ノ収入税ヲ徵收セラレンコトヲ希望ス

本案ノ説明ハ書記官伊東巳代治氏ノ筆記書中ニ詳ナリト雖モ、需要ニ依リ更ニ説明書ヲ作ルヘシ  
 右上申候、敬具

一千八百七十四年十一月廿九日

カ・ルードルフ

參議兼宮内卿伯爵伊藤博文閣下

第一条 凡ソ日本國民ニシテ本国或ハ外國ニ住居シ、一人ニテ或ハ其家族ノ有スル特別収入ヲ合算シ、一ケ年四百円以上ヲ收入スル者ハ、皇族ヲ除クノ外悉ク収入税ヲ納ムルノ義務ヲ有ス

第二条 外國ニ居住スル日本國民ハ、外國ニ於テ有スル土地ノ収入ニ付、外國政府ニ収入税ヲ納メタルコトヲ説明スルトキハ、此収入税ヲ免除スベシ

第三条 凡ソ外國人ニシテ營業ノ為メ又ハ一年以上日本國內ニ住居スル者ハ収入税ヲ納ムヘシ、但此義務各國ト締結セル現行條約ニ抵触スルトキハ此限ニアラス

外國人ニシテ日本國內ニ於テ土地ヲ所有スル者、其収入金額一ケ年四百円以上ナルトキハ同ク収入税ヲ納ムヘシ、外國人ニシテ内地ニ於テ商工業場所ヲ有スル者モ亦之ニ準ス、但此義務各國ト締結セル條約ニ抵触スルトキハ此限ニアラス

第四条 収入税ハ納税義務者ノ土地・資本或ハ商工業其他利益ヲ目的トスル營業ヨリ収入スル金額、若クハ年月及日給或ハ其他ノ利益金額ニ準シテ賦課スルモノトス、但各納税義務者ノ納税額ハ次條ニ記載スル等級ニ応シ賦課スルモノトス

第五条 収入税ノ等級ハ左ノ如シ

第一等	一ケ年四百円以上	五百円以下	一円
第二等	同	六百円同	二円
第三等	同	七百円同	四円
第四等	同	七百円同	六円
第五等	同	八百円同	八円
第六等	同	九百円同	十一円
第七等	同	千円同	十四円
第八等	同	千二百円同	十八円
第九等	同	千三百円同	二十二円

第十等	同	千三百円同	千四百円同	二十六円
第十一等	同	千四百円同	千五百円同	三十一円
第十二等	同	千五百円同	千六百円同	三十六円
第十三等	同	千六百円同	千七百円同	四十二円
第十四等	同	千七百円同	千八百円同	四十八円
第十五等	同	千八百円同	千九百円同	五十四円
第十六等	同	二千円同	二千二百円同	六十円
第十七等	同	二千二百円同	二千四百円同	六十六円
第十八等	同	二千四百円同	二千六百円同	七十二円
第十九等	同	二千六百円同	二千八百円同	七十八円
第二十等	同	二千八百円同	三千円同	八十四円
第二十一等	同	三千円同	三千五百円同	九十円
第二十二等	同	三千五百円同	四千円同	百零五円
第二十三等	同	四千円同	四千五百円同	百二十円
第二十四等	同	四千五百円同	五千円同	百三十五円
第二十五等	同	五千円同	五千五百円同	百五十円
第二十六等	同	五千五百円同	六千円同	百六十五円
第二十七等	同	六千円同	六千五百円同	百八十円

第二十八等	同	六千五百円同	七千円同	百九十五円
第二十九等	同	七千円同	七千五百円同	二百十円
第三十等	同	七千五百円同	八千円同	二百二十五円
第三十一等	同	八千円同	八千五百円同	二百四十円
第三十二等	同	八千五百円同	九千円同	二百五十五円
第三十三等	同	九千円同	九千五百円同	二百七十円
第三十四等	同	九千五百円同	一万円同	二百八十五円
第三十五等	同	一万円同	一万一千円同	三百円
第三十六等	同	一万一千円同	一万二千円同	三百三十円
第三十七等	同	一万二千円同	一万三千円同	三百六十円
第三十八等	同	一万三千円同	一万四千円同	三百九十円
第三十九等	同	一万四千円同	一万五千円同	四百二十円
第四十等	同	一万五千円同	一万六千円同	四百五十円
第四十一等	同	一万六千円同	一万七千円同	四百八十円
第四十二等	同	一万七千円同	一万八千円同	五百十円
第四十三等	同	一万八千円同	一万九千円同	五百四十円
第四十四等	同	一万九千円同	二万円同	六百円
第四十五等	同	二万二千円同	二万五千円同	六百六十円

第四十六等	同	二万五千円同	三万円同	七百五十円
第四十七等	同	三万円同	三万五千円同	九百円
第四十八等	同	三万五千円同	四万円同	千零五十円
第四十九等	同	四万円同	四万五千円同	千二百円
第五十等	同	四万五千円同	五万円同	千三百五十円
第五十一等	同	五万円同	六万円同	千五百円
第五十二等	同	六万円同	七万円同	千八百円
第五十三等	同	七万円同	八万円同	二千二百円
第五十四等	同	八万円同	九万円同	二千四百円
第五十五等	同	九万円同	拾万円同	二千七百円
第五十六等	同	拾万円同	拾一万円同	三千円

以下、壹万円毎ニ三百円ヲ加ルモノトス

一等乃至十二等ノ収入税ヲ各納税義務者ニ賦課スルニハ、其納税力ニ關係アル家計ノ有様（一家ニシテ數多ノ児童ヲ有スル者、又ハ數多ノ家族ヲ養フ者、長病ニ罹ル者、負債ヲナシ又ハ非常ノ災ニ遭遇シ納税力ヲ減セラレタル者）ヲ斟酌シ一等ツ、減税スルヲ得、此場合ニ於テ第一等ノ税ヲ納ムヘキ者ハ免税スルヲ得

第六條 収入税ヲ賦課シ、且ツ之ニ關スル申立<sup>申立</sup>ヲ裁決スル為メ、各郡区ニ於テ収入税事務局ヲ設ケ、郡区長ヲ以テ其委員長ニ任シ、或ハ県令ヨリ特ニ委員長ヲ命スヘシ、郡収入税事務局長ハ県会ニ於テ各郡ノ収入税義務者中ヨリ選任シ（但、郡会設置ノ後ハ郡会ニ於テ其委員ヲ選任スヘシ）、区収入税事務局長ハ区会ニ於テ其区内ノ収入

税義務者中ヨリ選任スヘシ

委員ハ可成各郡区中ニ現存スル収入各種類（土地・資本及營業）ヨリ平等ニ選挙スヘシ  
 当選人ハ左ノ場合ニ限り之ヲ拒ムコトヲ得

- (イ) 既ニ三ヶ年間引継キ委員タリシトキ
- (ロ) 年齢滿六十年以上ナルトキ
- (ハ) 五名以上ノ未丁年者ヲ有スルトキ
- (ニ) 後見人タルトキ
- (ホ) 疾病ニ罹リ平常ノ職務ニ堪サルトキ

収入税事務局ノ委員ハ六名トス、其外四名ノ代委員ヲ選挙スヘシ、郡区収入税義務者ノ數七名以内ナルトキハ、此義務者ヲ以テ委員トスヘシ、収入税事務局長ハ其委員四名以上出席スルトキハ決議ヲナスヲ得、此決議ハ過半多數ヲ以テ決ス、議長（委員長）ハ委員ノ可成同數ナルトキニ限り發言スルヲ得、事務局ノ達并裁決ニハ議長及委員二名以上之ニ署名スヘシ、府知事及県令ハ時宜ニ依リ郡区ヲ二或ハ數多ノ收税区ニ分割スルヲ得

第七條 府県ニ於テハ府県委員局ヲ設ケ、府知事及県令ヲ以テ委員長ニ任シ、或ハ大藏卿ヨリ特ニ委員長ヲ命ス、凡ソ収入税事務局ノ処分及裁決ニ對スル故<sup>ハシラセ</sup>障及異議<sup>レヲ生ジ</sup>、又該局委員長ヨリ該局ノ決議ニ對スル異議ヲ裁決セシム、府県委員ハ府県会ニ於テ府県内ノ収入税義務者中ヨリ選任スヘシ、其在任期限ハ三ヶ年トス  
 府県委員ハ委員長ヲ除キ十名トス、其他六名ノ代委員ヲ選挙シ委員ノ事故アルトキハ之ニ代ラシム、府県委員局ハ委員若クハ代委員六名以上出席スルトキハ決議ヲナスヲ得、此委員ハ可成収入各種類ヨリ平等ニ選挙スヘシ、當選ノ拒絶、決議ノ方法并決議書ノ署名ニ關シテハ前條ノ定規ヲ用ユヘシ

第八条 収入税事務局委員長ハ其管内人民ニ收入税ヲ賦課スルノ事務ヲ総理シ、<sup>41)</sup>、<sup>42)</sup>、<sup>43)</sup>、此法律ノ規定ニ準シ之ヲ執行スヘシ

委員長ハ殊ニ其管内ノ人民并ニ外国ニ居留シ、其管内ニ於テ土地ヲ有スル者ノ中收入税義務者ト認ムヘキ者ニ付キ詳細ノ収入簿ヲ製スヘシ

委員長ハ又納税義務者ノ所有財産、營業及其他ノ収益ニ付可成詳細ノ報告ヲ取り、其他總テ收入ノ測定ニ付判断シ得ヘキ徵候ヲ取集ムヘシ、此場合ニ於テ委員長ハ直接或ハ間接ニ納税義務者ヲシテ其財産及收入ニ付説明ヲナシムヘカラス、之ニ反シ義務者ハ自ら其収入額ヲ委員長或ハ各委員ニ説明スルヲ得、此説明ニ付格別疑フヘキコトナキトキハ専ラ之ヲ以テ標準トスヘシ

委員長ハ収入簿ヲ製シ并ニ財産及収入ニ付報告ヲ取集ムルニ際シテ、戸長ヲシテ輔佐セシムルヲ得、戸長ハ委員長ノ命令ニ從ヒ其請求ニ応スヘシ

委員長ハ戸長ヨリ差出シタル報告ヲ收入簿中ニ登録シ、而テ義務者ノ收入總高ヲ測定シ、該簿中一定ノ場所ニ依ニ其等級ヲ記入スヘシ、此場合ニ於テ第二十六条第二十七条及第二十八条ノ算定規則ヲ適用スヘシ

委員長ハ會議ニ必要ナル準備ヲナシ、其決議ニ異議ナキトキハ之ヲ施行スヘシ、委員ハ委員長之ヲ召集スヘシ

第九条 収入税事務局ハ委員長ヨリ差出シタル収入簿ヲ領收シ充分審査スヘシ、若シ各納税義務者ノ財産及収入ヲ詳細スルニ必要ト認ムルトキハ、戸長役場ニ就キ諸帳簿ヲ取調ルヲ得

之ニ反シ收入税ノ賦課額ヲ定ムルニ際シ、納税義務者ヲシテ其財産及収入ニ付説明セシムルヲ得ス、納税義務者自ラ之ヲ説明シタル場合ニ於テ、別ニ疑フヘキコトナキトキハ可成其説明ヲ以テ標準トスヘシ

収入税事務局ハ納税義務者ノ財産及収入ヲ審査シタル後、其收入高ニ付キ発見シタルコトアルトキハ、加算減算ヲ

ナシ以テ其收入税ノ等級ヲ確定スヘシ

各納税義務者ニハ確定シタル等級并ニ其納ムヘキ金額ヲ記載シタル封書ヲ送達スヘシ、此封書中ニハ納税者ニ於テ異見アルトキハ、三十日以内（此期限ヲ超過スルトキハ申立ノ權利ヲ失フモノトス）ニ之ヲ委員長ニ申立ルヲ得、又之カ為メ書面或ハ口頭ノ弁論ヲ以テ、自身或ハ一名乃至二名ノ信用者ト共ニ、又ハ其他ノ証拠方法ヲ以テ税額ノ不当ナルコトヲ明ニスルヲ得ルト記載スヘシ

収入税事務局ハ此申立ニ就キ會議ヲ開キ決議スヘシ、但委員長此決議ニ對シ異議ヲ申立ルトキハ府県委員局長ノ裁決ヲ得

納税義務者ハ委員局長ノ決議ニ對シ、決議書送達ノ日ヨリ三十日以内（此期限ヲ超過スルトキハ異議ヲ申立ルノ權利ヲ失フモノトス）ニ府県委員局長ニ異議ヲ申立ルヲ得、此異議申立書ハ収入税事務局委員長ノ手ヲ經由シテ差出スヘシ

該局委員長ハ委員局長ノ決議ニ對シ府県委員局長ニ異議ヲ申立ルヲ得、納税義務者ハ其裁決ニ至ルマテ收入税事務局ノ確定セル税額ヲ納ムヘシ、但府県委員局長ノ此納額ヲ不足ナリト裁決スルトキハ之ヲ追徴スヘシ

第十一条 府県委員局長ハ収入税事務局ノ処分及裁決ニ對スル故<sup>44)</sup>、障<sup>45)</sup>及異議<sup>46)</sup>、并ニ該局委員長ヨリ申出タル異議<sup>47)</sup>ヲ裁決ス、該局ハ委員長ヨリ申出タル異議ヲ審査スルニ當リ、収入税事務局ト同一ノ權利ヲ有ス

府県委員局長ハ納税義務者ヨリ申出タル異議ヲ審査スルニ當リ、若シ該義務者ノ書面或ハ口頭ヲ以テ弁論シ、或ハ其他ノ証拠方法ニ依リ税額ノ不当ナルコトヲ説明セサルトキハ、自ら本人ノ財産及収入ヲ確定スヘシ、府県委員局長ハ之カ為メ必要ナル場合ニ於テハ管轄裁判所ニ照會シテ証人ヲ訊問セシメ、或ハ異議者ニ其財産及収入ニ付訊問ヲナシ、或ハ其所持スル書類即チ借地条約、借用証書、商業帳簿等ヲ提出セシムヘシ、若シ本人該局ヨリ定メタル期限

内ニ答弁セス、或ハ書類ヲ提出セサルトキハ、異議ノ理由ナキモノト看做シ之ヲ却下スヘシ（此事ヲ其都度異議者ニ達スヘシ）、府県委員局ハ他ニ収入ノ実額ヲ明ニスルノ便方ナキ時ハ、異議者ヲシテ其収入ニ付書出シタル金額ノ相違ナキコトヲ宣誓セシムヘシ、此場合ニ於テハ宣誓ノ文言ヲ確定シ遅クモ八日以内ニ之ヲナサシムヘシ、若シ之ヲナサハルトキハ異議ノ理由ナキモノト看做シ之ヲ却下スヘシ

府県委員局ノ裁決ニ対シ控訴スルヲ許ルサス

第十二条 納税義務者ノ申立タル異議ヲ審査スル場合ニ於テ、府県委員局ヨリ其収入実額ノ申立ヲ請求シタルニ、義務者故意ヲ以テ其収入ノ一部ヲ隠匿シ或ハ之ヲ減少シテ申出タル時ハ、之カ為メ減シタル税額ノ四倍ヲ罰金トシテ徴収スヘシ

此場合ニ於テ納税義務者ノ租税ノ不足、其税額ノ四倍及裁決ノ為メ生シタル費用ヲ納メサルトキハ、裁判所ニ於テ之ヲ裁判スヘシ

收入ニ関シ納税義務者ノ郡区長或ハ戸長ノ面前ニ於テナシタル説明ハ、前項ノ場合ニ於テハ裁判所ニテナシタル白状ト同様ノ効力ヲ有ス

第十三条 府県委員局ハ収入税事務局ノ確定セル収入税簿ヲ丁寧ニ調査シ、該事務局ノ将来収入税ヲ課スルニ於テ注意スヘキ事項アルトキハ之ヲ諭示スヘシ

第十四条 大蔵卿ハ全国ノ収入税事務ヲ総理シ、且ツ府県委員局長及委員長ノ手續ニ対スル故障ヲ裁決ス

第十五条 収入税事務局委員長并ニ官吏ハ、此事務ヲ執ルカ為メ知り得タル人民ノ財産及収入ヲ他ニ漏洩スヘカラス、委員ハ此義務ヲ遵守スルコトヲ委員長ニ盟ワヘシ

第十六条 収入税ハ四期ニ納ムヘシ

第一期ハ九月一日迄トス

第二期ハ十二月一日迄トス

第三期ハ三月一日迄トス

第四期ハ六月一日迄トス

租税ヲ納ムヘキ場所ハ租税局ニ於テ之ヲ定ムヘシ

納税義務者ハ六ヶ月九ヶ月若クハ一ヶ年分ヲ取纏メテ一時ニ納ムルヲ得

第十七条 収入税事務局ヨリ賦課セル収入税ハ、義務者ノ異議ヲ申立ルカ為メ猶予スルヲ得ス、必ス其期日ニ納ムヘシ、但後ニ至リ過納トナリタルトキハ之ヲ返却スヘシ

俸給・手当金・退職料等ニ課スル収入税ハ、之ヲ交付スル所ノ会計局ニ於テ収入税ヲ引去リ、収入税徴収所ニ送致スルヲ得

第十八条 税額ヲ定メタル一ヶ年内ニ於テ収入ニ増減アルモ、一旦賦課シタル税額ヲ増減セス、但収入ノ一種類ヲ喪失シタルカ為メ其金額ノ四分一以上ヲ減シタルコトヲ証明スルトキハ、之ニ準スル減税ヲ請求スルヲ得

納税者ノ死亡或ハ其他ノ原因ニ依リ収入全ク消滅スル時ハ、一旦賦課シタル租税ヲ免除スヘシ

第十九条 納税義務者此期限或ハ申立及異議ノ期限ヲ怠ル時ハ、減税免税若クハ過納ノ返却ヲ請求スルノ權利ヲ失フモノトス

申立・異議或ハ減税免税ヲ期限内ニ申立テ至当ト認ラレタル時ハ、其年ニ限り収入税ヲ減免ス

納稅義務者管轄ノ官庁ニ申立、或ハ異議ヲナシ、或ハ減免稅ヲ申立ル時ハ、該庁ニ於テ之ヲ其管轄庁ニ送達スヘシ、但此間ニ經過セル時日ハ期限ノ中ニ算入セス

第二十条 納稅義務者收入稅ノ賦課ヲ免シ、或ハ收入稅ノ賦課ヲ定メタル後、新ニ收入ヲ得タル者アル時ハ、其收稅年度ニ限り收入稅ヲ追徵スヘシ

收入稅ヲ免レタル者アリト雖モ、前年度ノ收入稅ヲ追徵スルヲ得ス

第二十一条 收入稅ノ賦課ヲ少ク定メタルノ故ヲ以テ、該年度ノ收入稅ヲ増加セス、トス

第二十二条 未納收入稅或ハ猶予シタル收入稅ノ徵收ハ、徵收ノ翌年ヨリ起算シ四年ノ後二期滿得免スルモノトス  
期滿得免ノ期限ハ納稅者ヲ督促シ并ニ權制執行ヲ命ジ、或ハ新ニ猶予ヲ許可スルカ為メ消滅スルモノトス  
最後ノ督促狀ヲ送達シ權制執行ヲ命ジ、或ハ許可セル猶予日限ノ經過セル翌年ヨリ起算シ、更ニ四年ノ期滿得免期限ヲ始ムヘシ

第二十三条 納稅義務者ハ期滿得免期限ヲ經過シタル後ハ、政府及收稅官吏ヨリ收稅ノ請求ヲ受ルコトナキモノトス

第二十四条 租稅ノ賦課及徵收費ハ國庫ヨリ支弁スヘシ、但納稅義務者ノ異議ヲ申立タルカ為メ其收入ヲ取調タル費途ハ、義務者ノ申立其要點ニ於テ不正ナルトキニ限り本人ヨリ支弁セシムヘシ、委員ニハ會議ノ日限中并ニ其住所

外ニ出張スルトキハ出張中日當ニ円ヲ給ス、旅費一里ニ付二十錢ヲ給ス

第二十五条 收入稅ヲ賦課シ、且ツ之ニ關スル申立及異議ヲ裁決スルニハ、左ノ三ヶ条ニ準シ收入ヲ算定スルヲ得  
第二十六条 土地ノ收入トハ納稅義務者ノ自ラ使用シテ收ムル所ノ利益、并ニ之ヲ他人ニ貸渡シテ收ムル所ノ利益ヲ

總稱ス

他人ニ貸渡シタル土地及家屋ノ收入ヲ算定スルニハ、借地料家賃借主ノ納ムヘキ現品及其勤ムヘキ勞力、其他貸渡

人ノ權利ニ屬スル使用權等ヲ合算シ、其中ヨリ貸渡人ノ義務ニ屬スルモノヲ引去ルヘシ

貸渡サ、ル土地ノ收入ヲ算定スルニハ、所有者ノ自ラ使用シテ收メタル利益ノ、前三ヶ年平均高ヲ以テ收入トスヘシ

土地ニ關スル製造所（米磨車、粉挽車、酒及麥酒釀造所、煉化石及瓦製造所ノ類）ニ付テハ、若シ其存在スル土地ノ收益ヲ算定スルニ當リ、此製造所ノ利益ヲ共ニ算入セザリシトキハ、其收メタル純益ノ前三ヶ年平均高ヲ以テ製造所ノ收入トスヘシ

石工所鑿石採掘所、石灰製造所、白墨製造所、鉦穴及鑄鉦所モ同ク前三ヶ年平均高ヲ以テ其收入トスヘシ  
土地所有者ノ自ラ使用スル建物ノ收入ハ、其地方慣行ノ家賃ニ準シ算定スヘシ

土地ニ屬スル義務及租稅并ニ土地抵當借入金及其他借金ノ利息ハ收入ノ中ヨリ除去スヘシ、但請求ニ依リ貸主ノ住所及氏名、并ニ借用証書ノ月日等ヲ証明スヘシ

第二十七条 資本ヨリ生スル收入トハ、納稅義務者ノ私人、政府、銀行、諸会社、或ハ外国政府等ニ對シ有スル所ノ請求權ヨリ生スル利息及利益金ヲ總稱ス、其他相互ノ條約ニ基キ年金、物品其他ノ利益ヲ收入スル者モ之ニ準ス  
公債証書或ハ私債証書、其他株券等ニ於テ定メラレタル利息及利益金ノ收入稅ヲ算定スルニ、各年ノ利息利益金總高ヲ以テ其收入トスヘシ

利息及利益金額ニ年々不同アルトキハ、其前年度ノ收入額ニ收入稅ヲ課スヘシ

此納稅義務者負擔ヲ有スル場合ニ於テハ、前条末項ノ規定ニ準シ其利息ヲ收入額ヨリ除去スヘシ、商業并ニ營業ニ關スル貸借ハ次條ノ收入ヲ確定スルニ當リ差引スヘシ

第二十八条 商業、工業或ハ其他ノ收引營業（例ハ、トス、醫師代官人、著述者ノ類）ヨリ生スル收入、其他退隱料、

手当金、或ハ動産及不動産ヨリ生スル利益ニアラサル諸収入ハ、左ノ方法ニ拠リ税額ヲ定ムヘシ  
 商業、工業或ハ其他ノ収利營業<sup>ニ</sup>ヨリ生スル収入ハ、營業三年以上引続キタルトキハ前三ケ年ノ平均高ニ拠リ収  
 入税ヲ算定スヘシ、其中建物及營業用具ノ割引（建物等使用ニ由リ年々其価ヲ減スルヲ以テ、其割合ニ準シ原価ヨ  
 リ割引スルヲ云フ）、其他營業ノ為メ必要ナル費用ヲ引去ルヘシ、但納稅義務者ノ家計ニ關スル費用或ハ業務ノ拡  
 張改良等ニ關スル出費ハ引去ラ得ス  
 官吏給料ノ如キ確乎タル収入ハ其金額ニ收入税ヲ課スヘシ、但法律ノ規定ニ準シ退職料資金及寡婦扶助資金中ニ寄  
 附スヘキ金額ハ其中ヨリ引去ヘシ  
 官宅并ニ官宅附属地ヲ算定スルニハ、其土地慣行ノ家賃及借地料ニ準シ之ヲ俸給ニ加算スヘシ、但官宅及附属地ヲ  
 給スルカ為メ既ニ俸給ノ額ヲ減シタル時ハ此限ニアラス  
 納稅義務者負債ヲ有スル場合ニ於テハ、第二十六条ノ末項ニ準シ之ヲ引去ヘシ  
 第二十九条 地租ヲ軽減シ或ハ其他改正ヲ行フニ至ルマテ土地収入ノ税ヲ免除シ、收入税ヲ納ムヘキ収入ノ中ニ算入  
 セス

第三十条 追テ何等ノ法規ヲ定ルニ至ルマテ酒造所収入ノ税ヲ免除シ、收入税ヲ納ムヘキ収入ノ中ニ算入セス  
 第三十一条 大藏卿ハ此法律ヲ施行スル為メ必要ナル規則及訓令ヲ發スヘキモノトス

（国立公文書館所藏「諸雜公文書」2A-37-雜1040）

4、〔明治18年末頃〕 所得稅收入予算及び説明書

所得稅收入予算書

一 課税スヘキ所得高金八千八百拾九万八千三百四拾貳円  
 此税金百八拾九万四千五百七拾五円

内訳

- (一) 官吏其他ノ俸給等所得金八百三拾四万七千三百六拾七円 但平均所得ノ式ナキ
- (二) 學術教授ノ所得及労働所得金五百五拾万八千七百貳拾貳円 但平均所得ノ式
- (三) 一人ノ日リ受ル俸給其他所得金五拾七万五千三百四拾六円 但平均所得ノ式
- (四) 利息所得金五千貳百貳拾万八千六百七拾七円 但平均所得ノ式
- (五) 貸金等ノ利息所得金三百七拾六万三千四百六拾六円 但平均所得ノ式
- (六) 公債ノ利息所得金九百五拾貳万九千三百三拾三円 但平均所得ノ式

此税金式拾三万八千貳百三拾三圓

但平均ノ式分半

(七) 禁煙 所得金八百貳拾四万五千四百四拾三圓

此税金式拾万六千三百三拾六圓

但平均ノ式分半

### 所得稅收入予算說明書

予算内訳第一項官府ヨリ受ル俸給手当及賞賜年金ハ、官吏月俸式拾五圓以上ノ者一ケ年ノ総額八百拾六万四千三百三拾七圓、年給恩賜金四拾七万二千六百六拾五圓ノ二項ヲ合シタルモノナリ

同項公共ヨリ受ル俸給手当金ハ、全国公立中學校師範專門校等ノ教員總數千九百四拾九人ノ内、其十分ノ一ハ一ケ年三百圓ノ俸給ヲ受ル者ト仮定シ、其所得金高五万八千五百圓ニ府県常置委員手当拾式万四千五百六拾圓(以上第三統計年鑑)ヲ加ヘタルモノナリ

予算内訳第二項學術技芸ニ關スル諸般ノ所得及勞銀ハ、免許代官人七百五拾五人(十六年度調)ヲ目安トシ、其中三分ノ一ハ一ケ年三百圓ノ所得アルモノト仮定シ、其金高五万三千三百三拾三圓トナリ、醫師ノ數三万五千九百九拾九人ヲ目安トシ、其半數ハ一ケ年三百圓ノ所得アリト仮定シタル所得高ハ五百三拾九万九千九百圓ナリ、又前二項ニ關セサルモノ及勞銀ニ於テ六万八千五百三拾九圓ノ所得アルモノト見積リ、右三項ヲ合シタルモノナリ

予算内訳第三項人民相對ノ約定ニヨリ雇主ヨリ受クル給金手当及之ニ類似セル諸般ノ所得ハ、甲乙種免許海員二千七百四拾九人ノ内、其三分ノ一ハ一ケ年三百圓ノ所得アル者ト仮定シ、其所得金高拾八万三千二百六拾六圓、國立銀行總數百拾ヶ所ノ内一ケ年三百圓ヲ得ルモノ毎行二員ト仮定シ其金高六万六千圓、私立銀行九拾ヶ所ニ於テ毎行一員一ケ年三百圓ノ所得アリト仮定シ其金高二万七千圓、類似銀行六百六拾ヶ所ノ内其三分ノ一即チ二百二拾ヶ所ニ於テ一

ケ年三百圓ノ所得アルモノ一員アリト仮定シ其金高六万六千圓、諸会社六千六百二ヶ所ニ於テ其十分ノ一即チ六百六拾ヶ所ニ一ケ年三百圓ノ所得アルモノ一員アリト仮定シ其金高拾九万八千圓、其他ノ雇人ニシテ一ケ年三百圓ヲ得ルモノ百拾七人ト仮定シ其金高三万五千百圓ト仮定シ、右數項ノ所得ヲ通算シタルモノナリ

予算内訳第四項商工業及商工ニ類似セル諸業ノ所得ハ、全国商業及工業ノ資本高拾億四千四百三拾七万三千四百拾二圓ト推算シ、右資本高ノ内二分ノ一ハ一ケ年ノ所得高三百圓未滿ノ者ノ資本ニ屬シ、殘ル二分ノ一即チ五億二千二百拾八万六千七百六圓ヲ三百圓以上ノ所得アル者ノ資本ニ屬スト仮定シ、夫ヨリ生スル利益高年一割ト見積リタルモノナリ

予算内訳第五項貸預及其他ノ金數ヨリ生スル所得ハ、両替屋質屋金穀貸付等ニ對シ、明治十五年地方稅賦課金高拾六万二千二百九拾一圓拾八錢ヲ目安トシ、其税金ハ營業資本高ノ千分ノ三ニ相當スルモノト仮定シテ求メタル資本高ハ、五千三百七拾六万三千七百二拾六圓ナリ、其内十分ノ三八三百圓未滿ノ者ノ資本ニ屬セルモノト看做シ、殘ル三千七百六拾三万四千六百八圓ヲ二百圓以上ノ所得アル者ノ資本ニ屬スト仮定シ、其所得高ヲ平均年一割ト積リタルモノナリ

予算内訳第六項公債証券ノ利子ハ、十七年度歳出予算表ノ額、即チ千四百二拾九万四千圓ノ三分一ハ一ケ年所得高三百圓未滿ノ者ノ所得ニ屬スト仮定シタルモノナリ

予算内訳第七項諸会社利益配当金ハ、私立銀行及類似銀行資本高千六百三拾四万六千六百七拾五圓(農商務省出版、商況年報ニ拠ル)、諸会社資本高二千七百七拾万四千九百六拾三圓(同商況年報ニ拠ル)ヲ目安トシ、私立銀行及類似銀行ハ其資本高ニ對シ八朱ノ利益配当アルモノト看做シ、又諸会社ハ五朱ノ利益配当アルモノト看做シタル高二百六拾九万六千七拾八圓ナリ、之レニ國立銀行利益配当高七百六拾一万四千二百二拾二圓(十五年度國立銀行報告ニ拠ル)



ヲ合シ、計金高千三十四万三千六百七拾五円ノ五分一八一ヶ年三百円未満ノ者ノ所得ニ属スル分ト見積リ、残ル五分ノ四ニ係ルモノナリ

(財務省財務総合政策研究所情報システム部財政史室所蔵「松尾家文書 31-2」)

5、〔明治18年末頃〕 所得税則 (修正案)

所得税則

第一条

凡ソ資産又ハ勞力ヨリ生スル所得金高一ヶ年三百円以上ノモノハ、左ニ記載スル科目ニ就キ此規則ニ依テ所得税ヲ納ムヘキモノトス、其同居ノ家族ニ属スル所得ハ總テ戸主ノ所得ニ算入ス

- 一 官府又ハ公共ヨリ受ル俸給手当及賞賚年金
- 二 學術技芸ニ関スル諸般ノ所得并勞銀
- 三 人民相對ノ約定ニヨリ雇主ヨリ受ル給金手当賞与金及之ニ類似セル諸般ノ所得
- 四 商工業及商工ニ類似セル諸業ノ利益
- 五 貸預ケ及其他ノ資財ヨリ生スル利益
- 六 公債証券ノ利子
- 七 諸会社株式ノ利益配当金

第二条

所得税ハ左ノ割合ヲ以テ納ムベシ

所得金高

三百円以上	百分ノ一ヶ半
四百五十円未満	百分ノ一ヶ半
四百五十円以上	百分ノ二
六百五十円未満	百分ノ二
六百五十円以上	百分ノ二ヶ半
九百円未満	百分ノ二ヶ半
九百円以上	百分ノ三

第三条

左ニ掲クルモノハ其所得税ヲ免除ス

- 一 一ヶ年間各種ノ所得ヲ通算シタル金高三百円ニ滴タサルモノ
- 二 軍人從軍中ノ俸給及ヒ其他ノ所得
- 三 官府又ハ公共ヨリ受ル旅費日当其他一時ノ所得
- 四 土地家屋ヨリ生スル所得
- 五 米商会所株式取引所及其仲買人ノ売買手数料、並ニ諸会社ノ所得ニシテ株主ニ配当スヘキモノ
- 六 公共ノ用ニ供スヘキ所得
- 七 社寺所有ノ資本ヨリ生スル所得ニシテ其社寺ノ用ニ供スヘキモノ

八 神社仏閣公園名所旧跡等保存ノ為メ募集シタル資本ヨリ生スル所得ニシテ其費用ニ充ツベキモノ  
第四条

所得税ハ前年一月一日ヨリ十二月三十一日迄ノ所得高ニ拠テ賦課ス、其税金上納ノ期限ハ左ノ如シ

- 第一期 其年五月三十一日限
- 第二期 同 八月三十一日限
- 第三期 同 十一月三十日限
- 第四期 同 翌年二月二十八日限
- 第五条

第一条ノ所得アル者ハ毎年二月十五日限、前年一月一日ヨリ十二月三十一日迄ノ所得高ヲ其居住町村ノ戸長ニ届出ベシ

但、本条ノ期限ニ至リ届出ヲナサ、ルモノアルトキハ、戸長ニ於テ其所得高見積ヲ立ツベシ

第六条

町村戸長ハ前条ノ届出又ハ見積リニ依リ所得高下調査ヲ作り、毎年三月十五日限郡区長ニ申告スヘシ  
但、届出ノ所得高不相当ト認ムルモノアルトキハ之ニ其意見ヲ付記スベシ

第七条

居住町村ノ外ニ於テ所得アルモノハ、予テ其所得アル場所ヲ居住地ノ戸長ニ届出ベシ

第八条

所得高調査ニ関シ郡区長ノ諮問ニ応スル為メ、一郡区毎ニ調税委員五名乃至拾名ヲ選定ス

第九条

調税委員ハ其郡区内区町村会議員ニシテ所得税ヲ納ムル者ノ互選ヲ以テ定ムベシ  
但、予テ一郡区毎ニ五名以上ノ調税委員補欠員ヲ選定シ置クベシ

第十条

調税委員ニ選挙セラレタル者ハ、已ムラ得サル事故アリ、郡区長ノ承認ヲ経ルニ非サレバ其任ヲ辞スルコトヲ得ス、  
但引続キ再選セラレタルモノハ此限ニアラス

第十一条

調税委員就職ノ年限ハ二ケ年トシ毎年全数ノ半ヲ改選ス、第一回ノ改選ニハ抽籤ヲ以テ其退任者ヲ定ム

第十二条

調税委員諮問会ヲ開カントストキハ、少クモ七日以前郡区長ヨリ其期日及集會場所ヲ調税委員ニ通告スベシ

第十三条

郡区長ハ第六条ニ依リ町村戸長ヨリ差出シタル下調査ヲ受ケ、調税委員ノ意見ヲ諮問シ、尚之ヲ斟酌増減シテ各個ノ  
所得高ヲ定ムベシ

但、調税委員予定ノ期日ニ出席ナキトキハ、其意見ヲ諮問セサルコトアルベシ

第十四条

調税委員ハ調税上郡区長ノ処分ニ關シ意見アルトキハ、処分後十日以内其事由ヲ府知事県令ニ具状スルコトヲ得、但  
此場合ニ於テハ府知事県令其再調ヲナスコトアルベシ

第十五条

納税者郡区長ニ於テ定メタル所得高ヲ不当ナリトスルトキハ、其通達ヲ得タル日ヨリ二十日以内府知事県令ニ具状シ、其再調ヲ求ムルコトヲ得

第十六条

第十四条第十五条ノ場合ニ於テモ、其税金ハ郡区長ノ定タル額ニヨリ第四条ノ期限ニ従ヒ上納スベシ、但再調ノ上過納トナリタルトキハ其過納金ノ下戻ヲ請フベシ

第十七条

第十四条第十五条ニ拠リ府知事県令再調ヲナシ、郡区長ノ定メタル所得高ヲ不適當ト認ムルトキハ之ヲ更正スベシ

第十八条

府知事県令再調ヲ為スニ方リ、其取調ニ關シ必要トスル帳簿及物件ハ、主任官吏ヲシテ検査セシムルコトアルベシ

第十九条

所得税ヲ納ムベキ者不在又ハ事故アルトキハ、代人ヲ僱キ本則ニ關スル諸般ノ事ヲ弁セシムベシ

第二十条

第七条ノ届出ヲ為サス、又ハ所得ヲ隠匿シ、其他詐偽ノ所為ヲ以テ脱税ヲ図リタル者ハ、其連脱ヲ図リタル金萬三倍ニ相当スル罰金又ハ科料ニ処ス

第二十一条

此規則ヲ犯シタル者ニハ、刑法ノ不論罪及減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

所得税予算

税金高

一	貳拾万三千八百五拾壹円拾三錢七厘
二	拾四万五千貳円四拾錢
三	壹万七千四百五拾円九拾錢八厘
四	百四拾六万三千三拾六円八拾八錢三厘
五	拾万八千七百七拾四円七拾錢八厘
六	貳拾壹万四千四百拾円
七	拾五万五千五百五拾五円拾貳錢七厘
合計	貳百三拾万五千七百八拾壹円拾六錢三厘

前表ノ如ク卷ケ年大約二百三拾余万円ヲ得ベキ予算ナリ

(財務省財務総合政策研究所情報システム部財政史室所蔵「松尾家文書」31、3)

6、明治20年 所得税法

朕所得税法ヲ裁可シ、茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十年三月十九日

内閣総理大臣伯爵 伊藤博文  
大蔵大臣伯爵 松方正義

勅令第五号(官報 三月二十三日)

所得税法

第一条 凡ソ人民ノ資産又ハ營業其他ヨリ生スル所得金高一箇年三百円以上アル者ハ、此税法ニ依テ所得税ヲ納ムヘシ

但、同居ノ家族ニ属スルモノハ総テ戸主ノ所得ニ合算スルモノトス

第二条 所得ハ左ノ定則ニ拠テ算出スヘシ

第一 公債証書其他政府ヨリ発シ若クハ政府ノ特許ヲ得テ発スル証券ノ利子、營業ニアラサル貸金預金ノ利子、株式ノ利益配当金、官私ヨリ受クル俸給、手当金、年金、恩給金及勲賦賞与金ハ直ニ其金額ヲ以テ所得トス

第二 第一項ヲ除クノ外、資産又ハ營業其他ヨリ生スルモノハ其種類ニ応シ收入金高若クハ收入物品代価中ヨリ国税、地方税、区町村費、備荒儲蓄金、製造品ノ原質物代価、販売品ノ原価、種代、肥料、営利事業ニ属スル場所物件ノ借入料、修繕料、雇人給料、負債ノ利子及雑費ヲ除キタルモノヲ以テ所得トス

第三 第二項ノ所得ハ前三箇年間所得平均高ヲ以テ算出スヘシ、但所得收入以来未タ三年ニ滿タサルモノハ月額平均、其平均ヲ得難キモノハ他ニ比準ヲ取リテ算出スヘシ

第三条 左ニ掲クルモノハ所得税ヲ課セズ

第一 軍人從軍中ニ係ル俸給

第二 官私ヨリ受クル旅費、傷疾疾病者ノ恩給金、及孤兒寡婦ノ扶助料

第三 營利ノ事業ニ属セサル一時ノ所得

第四条 所得税ノ等級及税率左ノ如シ

等級	税率
第一等 所得金高三万円以上	百分ノ三
第二等 所得金高貳万円以上	百分ノ二半
第三等 所得金高壹万円以上	百分ノ二
第四等 所得金高千円以上	百分ノ一半
第五等 所得金高三百円以上	百分ノ一

但所得金高八円位未滿ノ端數ヲ算セズ

第五条 所得税ハ前半年分ヲ其年九月ニ、後半年分ヲ翌年三月ニ納ムヘシ

第六条 此税法ニ依リ税金ヲ納ムヘキ所得アル者ハ、其年所得ノ予算金高及種類ヲ記シ、毎年四月三十日マテニ居住地ノ戸長ヲ經テ郡区長ニ届出ヘシ

第七条 各郡区役所管轄内ニ七名以下ノ所得税調査委員ヲ置キ、毎年調査委員會ヲ開キ所得税ニ関スル調査ヲ為サシム

調査委員定數ノ外五名以下ノ補欠員ヲ置キ欠員ノ補充ニ備フヘシ

調査委員及補欠員ニ選ハレタル者ハ正當ノ事由ナクシテ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第八条 調査委員ハ其郡区内ノ選挙ヲ以テ之ヲ定ム

第九条 調査委員ノ選挙人被選人ハ二十五歳以上ノ男子ニシテ、其郡区内ニ現住シ所得税ヲ納ムル者ニ限ル、但府県会規則第十三条第一款第二款第三款第四款ニ触ル、者ハ被選人タルコトヲ得ス

同条第一款第二款第三款ニ触ル、者ハ選挙人タルコトヲ得ス

第十條 郡区長ハ各町村内ニ五名ヨリ多カラサル町村選舉人ノ員數ヲ定メ、其町村人民中第九條ノ資格ヲ有スル者ヲシテ互選セシム、但便宜ニヨリ數町村ヲ合シテ五名ヨリ多カラサル選舉人ヲ定ムルコトヲ得

町村選舉人ハ第九條ノ範圍内ニ於テ調査委員及補充員ヲ選舉スヘシ

第十一條 調査委員ノ任期ハ滿四年トシ二年毎ニ全數ノ半ヲ改選ス、但第一回ノ改選ハ抽籤ヲ以テ其退任者ヲ定ム

第十二條 調査委員ノ手當、旅費其他調査ニ關スル費用ハ国库ヨリ之ヲ支給ス

第十三條 郡区長ハ第六條ノ届書ニ拠リ所得金高下調査ヲ製シ、其届書ト共ニ調査委員會ニ付スヘシ

第十四條 郡区長ハ納稅者ト認ムルモノニシテ、第六條ノ期限ヲ過キテ其届出ヲ為サ、ル者アルトキハ、所得金高ノ

見積ヲ立テ之ヲ調査委員會ニ付スヘシ

第十五條 調査委員會ハ郡区長ノ召集ニ由リ之ヲ開ク、調査委員會ノ會長ハ郡区長ヲ以テ之ニ充ツ、郡区長欠席スルトキハ會員ノ互選ヲ以テ之ヲ定ム

第十六條 調査委員會ハ會員過半數出席スルニアラサレハ會議ヲ開クコトヲ得ス、會議ハ出席員ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス、可否同數ナルトキハ會長ノ可否スル所ニ依ル、但自己ノ所得ニ關スルトキハ其會議ニ与ルコトヲ得ス

第十七條 郡区長ハ調査委員會ノ決議ニ拠リ各納稅者ノ所得稅等級金額ヲ定メ之ヲ納稅者ニ達スヘシ

第十八條 郡区長ハ調査委員會ノ決議ニ關シ意見アルトキハ府県知事ニ具狀シ指揮ヲ請フヘシ

第十九條 納稅者ニ於テ所得稅ノ等級金額ヲ不当トスルトキハ、其達ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ所得金高明細書及其証憑トナルヘキモノヲ添ヘ府県知事ニ申出ルコトヲ得、但此場合ニ於ケルモ其税金ハ達ヲ受ケタル金額ニ從テ之ヲ納ムヘシ

第二十條 府県知事ハ第十八條第十九條ノ場合ニ於テハ府県常置委員會ニ付シテ調査セシメ、其決議ニ拠テ之ヲ処分

スヘシ、但其処分納稅後ニ涉ルトキハ稅額ノ不足アルモノハ之ヲ追徵シ過剩アルモノハ之ヲ還付スヘシ

第二十一條 調査委員會又ハ常置委員會ハ此稅法ニ關シ調査上必要ト認ムルトキハ納稅者ニ尋問スルコトヲ得

第二十二條 調査委員其他所得稅ノ調査ニ關スル者ハ、納稅者ノ資産及所得ニ係ル事件ヲ他ニ漏洩スヘカラス

第二十三條 納稅者其納期前ニ於テ所得金高十分ノ五以上ヲ減損シタルトキハ郡区長ニ申出ルコトヲ得、郡区長ハ事實ヲ審査シテ其稅額ヲ減シ所得金高一箇年三百円ヲ下ルモノハ之ヲ免稅スヘシ、但既納ノ税金ハ之ヲ還付セス

第二十四條 所得金高ヲ隱蔽シテ通稅シタル者ハ其通稅金高三倍ノ罰金ニ処ス、但自首スル者ハ其税金ヲ追徵シ其罪ヲ問ハス

第二十五條 第二十二條ヲ犯シタル者ハ三百円以上三拾円以下ノ罰金ニ処ス

第二十六條 第六條ノ届出ヲ為サ、ル者ハ壹円以上壹円九拾五錢以下ノ科料ニ処ス

第二十七條 此稅法ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不諭罪及減輕、再犯加重、數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第二十八條 此稅法施行ニ關スル細則ハ大藏大臣之ヲ定ム

第二十九條 此稅法ハ明治二十年七月一日ヨリ施行ス

但、北海道、沖縄県及東京府管轄小笠原島、伊豆七島ニ於テハ官府ヨリ受クル俸給、手當、年金及恩給金ノ外ハ當分ノ内之ヲ施行セス

附 則

本法第六條ノ届出ハ本年ニ限り七月三十一日マテニ差出スヘシ

7、明治20年 所得税法施行細則

大蔵省令第八号

所得税法施行細則左ノ通相定ム

明治二十年五月五日

大蔵大臣伯爵 松方正義

所得税法施行細則

- 第一条 戸主ニ所得ナクシテ同居ノ家族ノミニ所得アル場合ニ於テモ、一家内ニ属スルモノハ總テ合算ノ上、其戸主ノ名ヲ以テ届出納税スヘキモノトス
- 第二条 税法第二条第三項ニ依リ所得ヲ算出スルハ、其年所得ヲ生スヘキ現在ノ資産又ハ現在ノ業務ニ応シ、前三箇年平均若クハ月額平均ノ歩合ニ依リ、又ハ他ノ比準ニ依ルヘキモノトス
- 第三条 物品ニテ收入スル所得ハ其相当価格ヲ以テ代金ヲ算出スヘシ
- 第四条 税法第六条ノ届書ハ第一号書式ニ依ルヘシ
- 第五条 左ニ掲クル者ハ一定ノ地ニ其納税管理人ヲ定メ、戸長ヲ經テ郡区長ニ届出、此税法施行ニ関スル諸般ノ事ヲ弁セシムヘシ
  - 一 此税法ヲ施行セサル地ニ居住シ、本法施行ノ地ニ於テ生スル所得金一箇年三百円以上ヲ收入スル者
  - 一 内外國ニ旅行シ又ハ外國若クハ此税法ヲ施行セサル地ニ寄留スル納税者
- 第六条 一人ニシテ數箇所ニ於テ所得ヲ收入スル者ハ、其居住地ノ郡区長ニ届出ヲ爲スト同時ニ、第三号書式ニ依リ其所得ヲ收入スル各地ノ郡区長ニ届出ヘシ

- 第七条 郡区長第六條ノ届出ヲ受クルトキハ之ヲ其納税地ノ郡区長ニ送付スヘシ、但其届出高ニ對シ意見アルトキハ別ニ其意見ヲ附スヘシ
- 第八条 納税者他ノ郡区役所所轄内ニ転居セントスルトキ及ヒ転居シタルトキハ、各其地ノ戸長ヲ經テ郡区長ニ届出ヘシ
- 第九条 郡区長第八條ノ他ニ転居セントスル者ノ届出ヲ受タルトキハ、直チニ転居者ノ所得税ニ係ル一切ノ事項ヲ其転居先ノ郡区長ニ通報スヘシ
- 第十条 郡区長ハ其所轄内ニ於テ納税者ト認ムルモノノ所得ニ關シ、調査上必要ナル場合ニ於テハ各地方ノ会社若クハ一個人ニ對シ其事項ノ問合ヲ爲スコトヲ得
- 第十一条 郡区長ハ調査委員選舉ノ爲メ、税法第六條ノ届出ニ依リ毎年五月納税者ノ住所姓名ヲ其管内ニ公告スヘシ
- 第十二條 調査委員會及ヒ調査委員選舉ニ關スル細則ハ府県知事之ヲ定ム
- 第十三條 調査委員ヲ辞スルコトヲ得ル者ハ、郡区長ニ於テ已ムヲ得スト思料スル事故アルモノニ限ル
- 第十四條 調査委員會ノ決議書ハ會長及委員二名以上之ニ署名スヘシ
- 第十五條 所得税ノ等級金額ハ第三号書式ニ依リ毎年八月十日マテニ之ヲ達スヘシ
- 第十六條 区長ニ於テ直ニ戸長ノ事務ヲ行フ区内ニ在テハ、府県知事ノ見込ヲ以テ大蔵大臣ノ認可ヲ受ケ、一区内ヲ數部ニ画シ每部二五名以下ノ臨時取調掛ヲ置キ、区長ノ指揮ニ從ヒ所得税調査ニ關スル下調ヲ爲サシムルコトヲ得
- 第十七條 税法第二十九條但書ノ所得ニ關スル等級金額ハ、北海道庁長官東京府知事沖繩県知事之ヲ査定スヘシ
- 第十八條 調査委員招集ニ応セサルカ又ハ會員過半数出席セス、若クハ其他ノ事故ニ依リ第十五條ノ等級金額達期限マテニ調査ヲ了セサルトキハ、郡区長ニ於テ等級金額ノ意見ヲ付シ府県知事ニ差出シ、府県知事ハ之ヲ大蔵大臣ニ

具状シテ指揮ヲ請フヘシ

第十九条 第五条ニ違ヒ又ハ第六条第八条ノ届出ヲ怠リタル者ハ、壹円以上壹円九拾五銭以下ノ科料ニ処ス

附則

本年ニ限り第十一条ノ公告ハ九月、第十五条ノ達ハ十一月ニ之ヲ為スヘシ

〔書式は省略〕

〔法令全書〕

### 8、明治20年 所得税法施行細則附則の改正

所得税法施行細則第十一条ノ公告及第十五条ノ達期限ハ、本年ニ限り特ニ附則ヲ以テ九月及十一月ト相定メ候処、税法施行日尚淺ク人民未タ能ク注意ヲ解セス、其所得額ノ調方ニモ慣熟セサルヨリ不適當ナル届出ヲ為ス者居多ニシテ、且届出後ニ至リ往往之レカ訂正ヲ請フ者亦尠カラス、随テ取調上ニ於テモ頗ル手数多ト時日ヲ要シ、到底附則定期ノ期日内ニ納税者ノ住所姓名ヲ公告シ、所得税ノ等級金額ヲ達スルノ手續ヲ了シ難キ実況ニ有之、殊ニ本年度ハ実施ノ初年ニモ有之、取扱上極メテ鄭重ヲ尽シ適當ナル調査ヲ遂ケ、将来ニ遺憾ナカラシメント欲ス、依テ附則ヲ改正シ第十一条ノ公告期限ハ十月、第十五条ノ達期限ハ十二月ト相定度、別紙省令案ヲ提出シ謹テ閣議ヲ乞フ

明治廿年九月八日

大蔵大臣伯爵 松方正義

内閣総理大臣伯爵 伊藤博文殿

大蔵省令第 号

本年五月省令第八号所得税法施行細則附則 左ノ通改正ス

年 月 日

大蔵大臣

附則

本年ニ限り第十一条ノ公告ハ十月末日迄ニ、第十五条ノ達ハ十二月末日迄ニ之ヲ為スヘシ

〔国立公文書館所蔵「公文雜纂」明治20年 第28卷〕

大蔵省令第十三号

本年五月省令第八号所得税法施行細則附則 左ノ通改正ス

明治二十年九月十五日

大蔵大臣伯爵 松方正義

附則

本年ニ限り第十一条ノ公告ハ十月末日迄ニ、第十五条ノ達ハ十二月末日迄ニ之ヲ為スヘシ

〔法令全書〕

### 9、明治21年 所得金高届等差出方諭告

諭告第壹号

明治廿年三月勅令第五号所得税法ニ基キ、相当所得アルモノハ同法第六条ニ依リ毎年四月三十日迄ニ届書可差出管之

処、若シ其届書ヲ出サ、ルモノハ犯則者トナリ不都合ニ付、同年六月当庁諭告第七号ヲ以テ配布シ置候届書式及納人心得備考等熟読、右期日迄ニ無相違可届出様注意スヘシ

但、納人心得備考無之者ハ当庁へ申出ヘシ

明治廿一年三月十日

大阪府北区長 加藤海蔵

(平4 大阪 49)

### 10、明治21年 所得金高届等差出方諭達

第二号

本郷区 地主差配人

所得税法第一条ニ拠リ、各自所得金高一箇年三百円以上アル者ハ、毎年四月三十日限り其年一月ヨリ十二月迄ノ所得金高届及所得税納入地届書差出スヘキハ勿論ニ候得共、若シ心得違ノモノ有之、期限ヲ誤リ或ハ本年始テ所得金高三百円以上ナルモ届出ヲ為サ、ル等ノ為メ、法令ニ触レ徳義ニ反キ候様ノコト有之候テハ容易ナラサル儀ニ付、地主差配人ヨリ懇篤注意シ各自遺漏無ク届出候様伝達スヘシ

右諭達候事

明治二十一年三月廿三日

本郷区長 北沢正誠

(昭62 本校 562)

### 11、明治25年 所得税納税者の標札掲出方伺

明治廿五年七月十四日署乙第一一八号直税署ヨリ各郡役所へ照会

所得税納税者門戸ニ標札掲出方ノ義ニ付、遠賀郡ヨリ問合ニ対シ別紙ノ通回答相成候条、為御参考及御差廻候也

(問合 遠賀郡長) 所得税納税者門戸ニ(所得税納税者)ト記シタル標札ヲ出サシムヘキ義ニ付、先年来及御問合候

処、本県下ニ於テハ決行セサル処ニ相定メ候趣、御回報ノ次第モ有之候得共、右ハ遺漏ナク届出ヲ為サシムルニ

ハ良法ト被存候条、別ニ御差支ノ筋無之候ハ、施行致度、此段及御問合候也

回答 収税長明治廿五年七月十四日署乙第一一七号

所得税<sup>納税者</sup>者門戸ニ標札掲出方、本月十一日付遠第六七二号ヲ以テ御問合ノ趣了承、右ハ申越ノ如キ標札掲出セシ

メラル、義ハ敢テ指問無之被存候、然レトモ右ニ関スル費用ハ支出難相成候条、右様御了知相成度、主管ノ件ニ

付本官ヨリ此段及御回答候也

(昭62 福岡 27)

### 12、明治29〜30年 税務署の所得税取扱方の件

庶務第二八号

今般税務管理局設置ノ結果、從來郡長取扱ニ係ル所得税及菓子税ニ関スル事務引継ヲ受クヘキ筈ナルニ依リ、右ニ関スル簿書類等一切代理引継ヲ受クヘシ



但、本文引継ヲ受ケタルトキハ其旨申報スヘシ

明治二十九年十一月十八日

東京稅務管理局長 大塚 實印

佐原稅務署長 竹中宮松殿

〔直甲第四二號ノ二ノ内示ヲ以テ自然消滅〕

直發第二二號

稅務署

本月十八日付庶務第二八號ヲ以テ稅務管理局設置ノ結果、從來郡長取扱ニ係ル所得稅及菓子稅ニ關スル事務引継受ノ件ニ付及邊置候処、該件ニ付郡長中異議ヲ存スル向モ有之哉ニ聞及ヘリ、然ルニ右ハ官制改正ノ結果当然事務ノ移転スヘキ義ニシテ、市制施行地ニ係ル分ハ既ニ知事ヨリ引継請ヲ了シ、而シテ市制施行地ニ於ケル知事ト郡ニ於ケル郡長ト、其關係ニ至リテハ別ニ区分ノアル義ニモ無之候条、右ニ相心得速カニ事務引継請ヲ了シ候様取計フヘシ

明治二十九年十二月二日

東京稅務管理局長 大塚 實印

直發第七號

稅務署

所得稅ニ關シ他管内ヘ交渉スル事項等ニシテ、其市ニ屬スルモノニアリテハ各所屬稅務署長ニ、其他ハ所轄郡長ニ通報スル義ト心得ベシ

明治三十年一月廿日

東京稅務管理局長 大塚 實印

直發第四一號

所得稅法執行方ニ付主稅局長ヨリ別紙甲印之通府県知事ヘ文信相成候趣ヲ以テ、乙印之通申來候条、為心得此段及内示候也

明治三十年三月三十一日

東京稅務管理局長 大塚 實印

佐原稅務署長 竹中宮松殿

甲 拜啓

所得稅法執行方ニ付テハ、本月廿六日付坤第三〇〇〇號ヲ以テ従前之通費官ニ於テ御取扱可相成旨通牒申上候処、右ハ官制改正之結果ヨリ見ルトキハ執行上多少之支障有之ニ依リ、彼是ノ不都合ヲ避クル為メ該法改正之管之処、其運ニ至ラス候ニ付テハ現法ノ如ク取扱ヨリ外無之、依テハ右辺宜敷御諒察被下度、尤モ所得下調之点ニ付テハ御便宜次第管理局又ハ稅務署ヲシテ取扱ハシメ候様可致積ニ有之ニ付、夫是御斟酌可然御取計希度存候、右得貴意候、草々、敬具

明治三十年三月廿六日

主稅局長 目根田種太郎

何府県知事 何某 殿

乙

所得稅法執行方ニ關シ地方長官ヘ通牒文写及御回付置候処、尚別紙之通文信致置候ニ付、地方長官ヨリ協議有之候節

ハ、可及丈便宜之手続ヲ以テ該法ノ実行ヲシテ円満ナラシメ候様厚御配慮相成度、此段申進候也

明治三十年三月廿七日

目賀田主税局長

大塚東京稅務管理局長殿

直甲第五〇号ノ二

各稅務署

所得稅ニ關スル事務取扱方之義ニ付、別紙之通主稅局長ヨリ通牒有之候間、義ニ引繼ヲ受ケタル事務ハ知事又ハ郡長  
へ更ニ引繼ヲ了シ其旨申報スヘシ

明治三十年三月卅一日

東京稅務管理局長 大塚 實團

坤第三〇〇〇号

所得稅法執行方ニ關シ今般別紙之通り地方長官ニ對シ通牒及置候ニ付、同長官ヨリ該稅下調事務ニ關シ協議有之候節  
ハ可然御処弁相成度  
右依命通牒候也

明治三十年三月廿六日

主稅局長 目賀田種太郎

東京稅務管理局長大塚 實殿

坤第三〇〇〇号

客年十月稅務管理局官制發布セラレ、其第一条ニ於テ内國稅ニ關スル事務ハ該管理局ノ主掌ニ帰シ候処、所得稅法ハ  
他稅法トハ其趣ヲ異ニスルヲ以テ、既ニ該事務御引繼相成候分ト雖モ、依然地方官庁ニ於テ御取扱相成候義ニ有之候  
右依命通牒候也

明治三十年三月廿六日

大藏省主稅局長 目賀田種太郎

県知事

追テ、市郡ニ屬スル所得金額下調事務ニ關シテハ、御便宜上稅務管理局又ハ稅務署ニ於テ取扱ハセ候義ハ差支無之  
ニ付、同局ト御協議之上可然御取計相成度、此段謹テ申進候也

(昭56 東京 2163)